愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第19 号
2018.5
9-30p
＊書籍出版後に文字等の修正を実施したPDF です。(2018.6.27)

# 大名倉遺跡の研究

永井邦仁・川添和暁

愛知県北設楽郡設楽町に所在する大名倉遺跡は、縄文時代早期～晩期の土器や石器が出土する集落遺跡として東海地域で屈指の存在である。本遺跡では、大正年間から地元で続けられてきた遺物の地表面採集や早稲田大学による発掘調査を経て、近年には愛知県埋蔵文化財センターが 223 か所の試掘トレンチによる範囲確認調査がなされている。本稿では主に範囲確認調査から得られた地層や地形のデータと出土遺物の検討によって、縄文時代遺跡の立地に関する見通しを得ることができた。

## 1．はじめに

愛知県北設楽郡設楽町大名倉滝ノ上・滝ノ下・下谷・南貝津に所在する大名倉遺跡は、同町指定史跡である。本遺跡では後述するように大正年間から縄文土器や石器が多数採集されており、三河地域山間部の縄文時代を代表する遺跡として知られている。また戦前と昭和 43（1968）年には、学術目的の発掘調査も行われている。

その一方で近年、本遺跡を含む設楽町大名倉地区においても、設楽ダム事業に関連する各種工事計画が進められている。それに伴って、愛知県埋蔵文化財センターでは各遺跡の範囲確認調査を行い、このうち西地・東地遺跡では平成 27・28 年度に本調査を実施した。本遺跡では、縄文時代後期初頭を中心として近世に至るまでの遺構や遺物が多数検出されている【川添 2018】。これに対して大名倉遺跡では、5 か年度にわたる範囲確認調査を経て、ようやく縄文時代の集落遺跡としての輪郭がみえてきた。本稿では、これまでの調査で蓄積された地層や遺構のデータの統合と、出土遺物を整理・検討した成果を総括する。それによって、大名倉遺跡における縄文時代集落の立地する地形および包含層の分布状況がどのように広がり、そして時間的な変化をみせるのかを明らかにしたいと考える。なお、地層データを永井が扱い、遺物の整理は川添がおこない、文責は文末に記した。

## 2．大名倉地区の遺跡と地形

大名倉遺跡の所在する設楽町大名倉地区は、豊橋市で三河湾に注ぐ豊川（寒狭川）の上流域にあたる（図 1）。同川流域は河口から中流域の新城市域までは谷底平野を形成しているが、上流域は三河高原（主に標高約 400 ～ 1,000m）の山間部にあって、大半が渓谷の中を流れている。しかし一部には狭小な河岸段丘が形成されて遺跡が分布している。設楽町内に

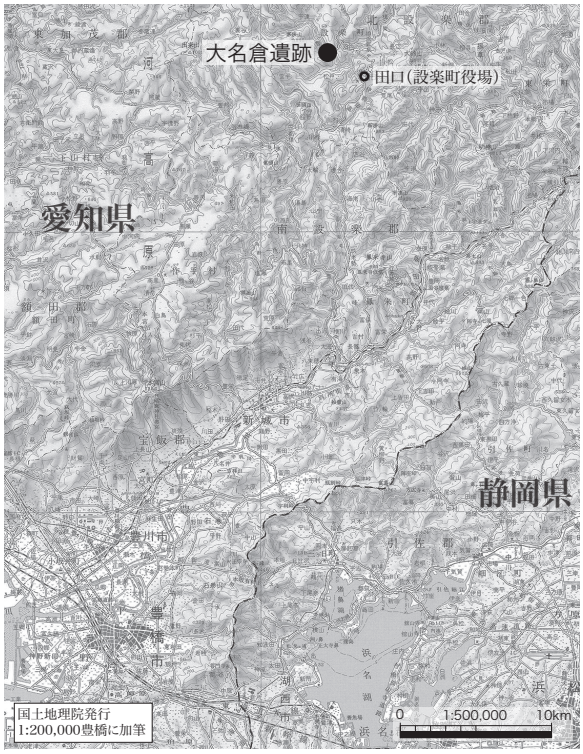


図 1　大名倉遺跡の位置（1:500,000）

はそのような河岸段丘のある谷地形がいくつかあり、同町大名倉地区もその１つである。

大名倉遺跡から約 2km 下流には、東方の八橋地区・川向地区から流れてきた境川との合流点がある。そこから上流側約 1km の間は遺跡がみられない。そして椹尾谷との合流点を過ぎるあたりから大名倉丸山遺跡、胡桃窪遺跡、ハラビ平遺跡、日掛遺跡が豊川に面して立地する。ただしこれらの遺跡の地形は大半が斜面地となっており段丘の発達はわずかである。よって地区内で比較的段丘が発達しているのは大名倉遺跡を中心とする一帯が唯一といってよいであろう（図 2）。

大名倉遺跡は豊川右岸に位置する。遺跡の北西方向から流下してきた豊川が段丘崖にぶつかって、一旦東方向へ屈曲した後に再び南東方向へと延びている。それに面する幅約 80m の段丘面は、北西から南東へ約 300m にわたって広がっている（図 3）。段丘崖は明瞭で氾濫原との高低差は約 5m ある。現河道は氾濫原からさらに数 m 河床を抉りこんでおり、近年は氾濫原の一部も水田として使われていた。

段丘面は比較的緩斜面であることから耕作地として利用されていた。耕作地から西側および南側では等高線が密になっておりその境界を昭和 36（1961）年に廃止された森林鉄道段戸山線（田口本谷線）の後身である道路（東海自然歩道）が延びている。等高線は、大名倉集落の宅地付近からさらに間隔が詰まっており、一段と傾斜が強くなることを示している。そして山林となっている山地斜面に至る。このように等高線に基づいて区分される大名倉遺跡の地形は、豊川河道→氾濫原→段丘崖→段丘面→丘陵端部緩斜面→丘陵斜面→山地斜面へと移行する。

そして等高線からもう１点読み取れるのが土石流の痕跡である。それは弓なりに張り出した等高線に表れており、大名倉遺跡では３か

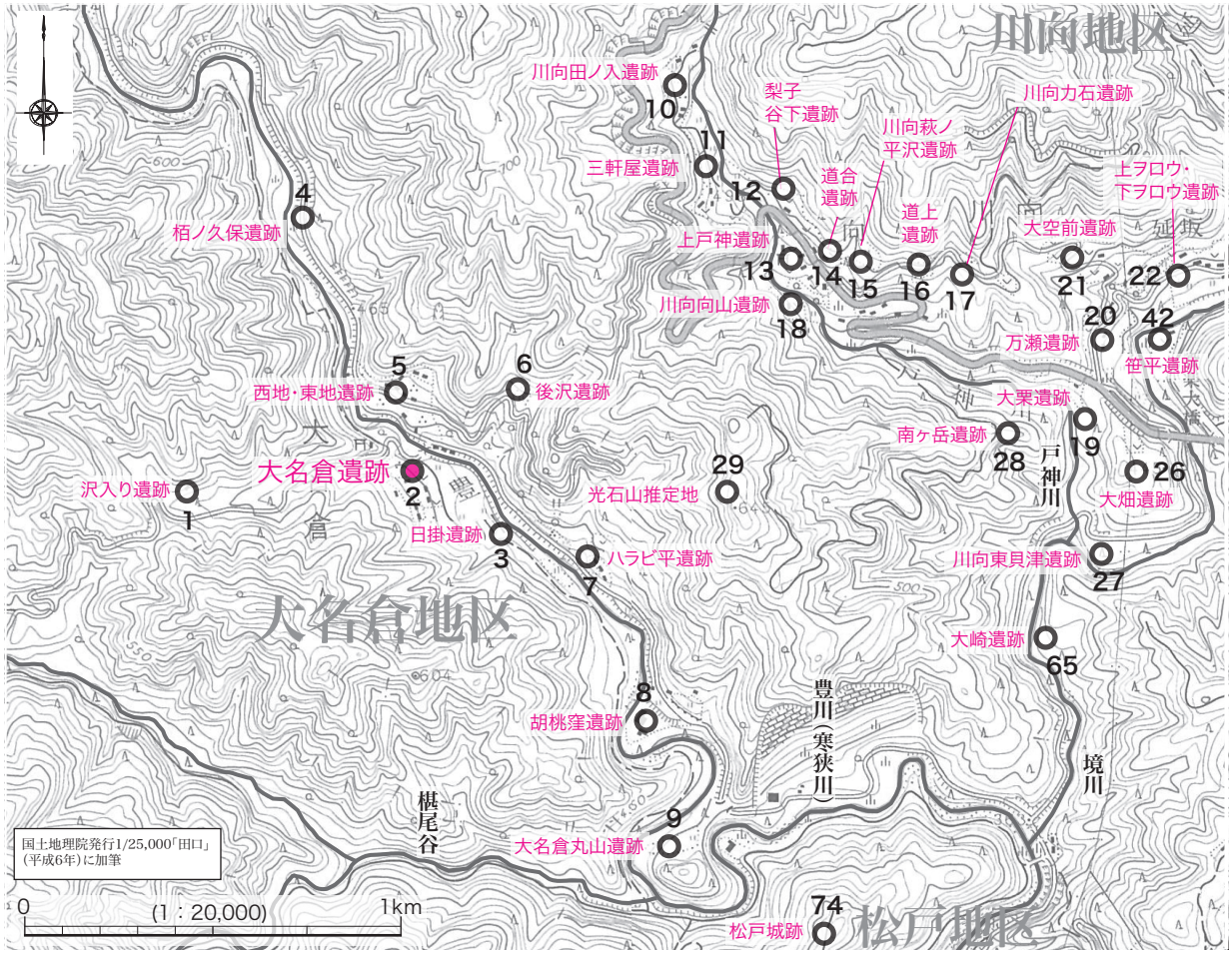


図２　大名倉遺跡とその周辺の遺跡分布

所にみられる。いずれも西側背後に細長い急傾斜の谷地形があるので、そこを経由して流出した土砂が堆積したものと考えられる。このうち南の土石流地形では、地元での聞き取りによって20世紀前半にもそれと推測される土砂流出があったということから、沢づたいに頻発していたものと思われる。

以上のように詳細地形測量図から読み取れる部分もあるが、全体が宅地・耕作地化している以上、特に埋没した谷地形やくぼ地は見えにくい。また土石流堆積もその広がりや厚さは地表面観察だけでは不明である。こういった点は、発掘調査によって地層断面を確認することであきらかになる場合もある。

## 3．大名倉遺跡における考古学的調査

### （1）地元考古学者による発掘調査

大名倉遺跡では、大正元（1912）年から地元在住の伊藤正松氏が、耕作中に出土した縄文土器や石器を採集したことでその存在が知られるようになった【岩野2002】。その後、夏目一平氏の報告に基づく北設楽郡内の先史・原史時代遺物発見地名表【小栗1932】では、「名倉村大字大名倉」として縄文土器片ほか7種の石器が列記されており、既に豊富な遺物の所在が明らかになっている。

初めて発掘調査が行われたのは昭和14

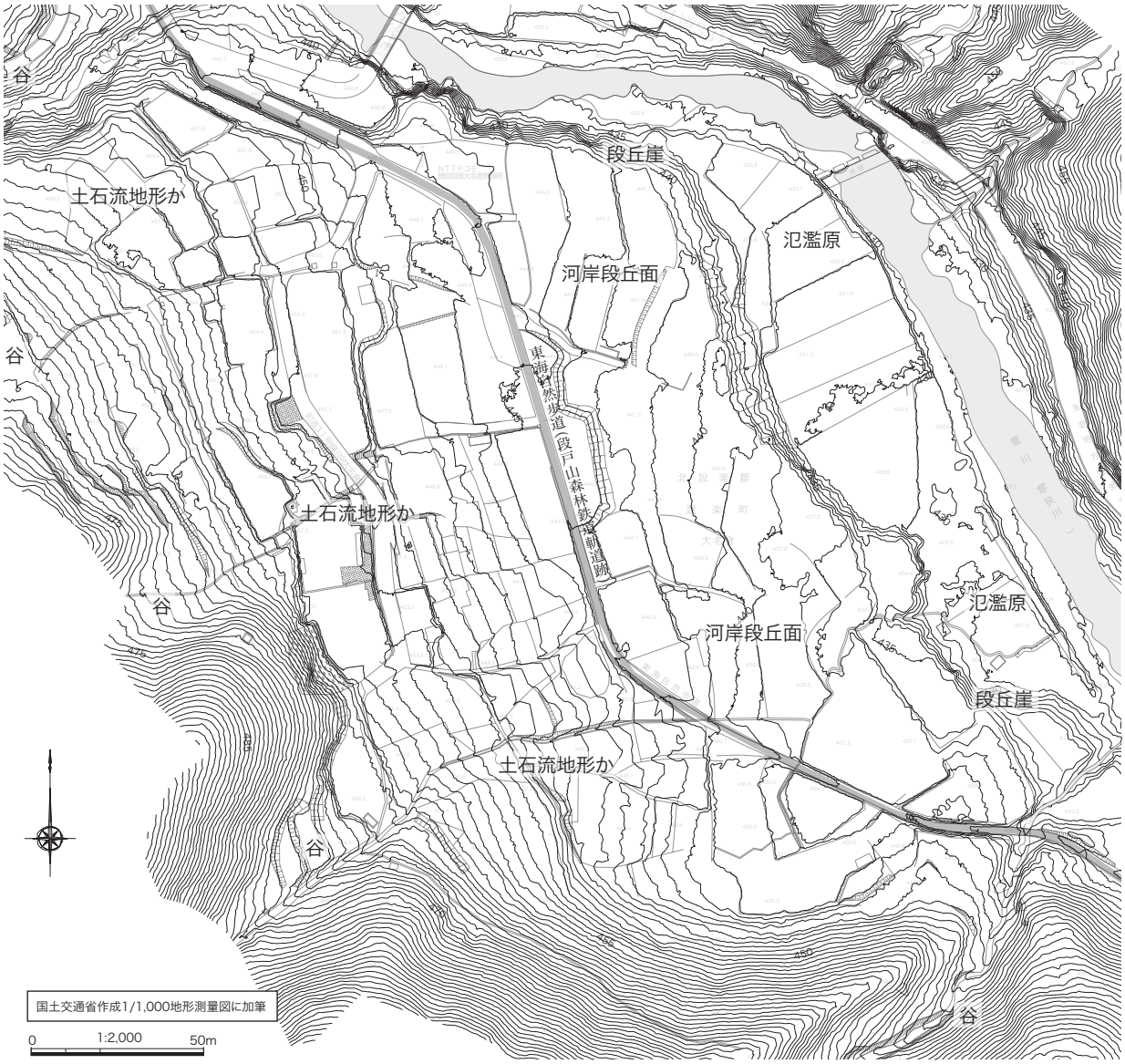


図3　大名倉遺跡の地形

(1939) 年で久永春男氏を招聘して行われた【大橋 2005】。鈴木冨美夫氏によれば「この調査の結果、同遺跡からの出土遺物は、縄文早・前・中・後・晩期の各期にわたり、土器も 20 形式以上に及ぶ県内稀な大複合遺跡であると」【鈴木 1997】評価され、東海地域屈指の遺跡として周知されるようになった。ただしこの時の発掘調査報告作成は戦時により中断したらしく、昭和 22 年 10 月に久永氏が再び当地に来訪して伊藤氏・沢田久夫氏らと作業を行っているが【森田 2013】、未完のままとなっている。

**（2）早稲田大学考古学研究会による発掘調査**

昭和 35 年に奥三河郷土館が開館し、故伊藤氏の遺志により採集遺物は町に寄贈された【岡田ほか 1968】。紅村弘氏は同館陳列の遺物から、縄文時代早期～晩期の各期で土器の量に増減があることや、後期（安行式・宮滝式）、晩期（大洞式）の詳細について述べている【紅村 1963】。

また昭和 25 年頃には、設楽町やその周辺地域において早稲田大学教授（当時）の桜井清彦氏や後藤淑氏（同）による遺跡踏査が行われ、遺跡地図の作成が進められた。その後 1960 年代には、桜井氏とともに平野吾郎氏ら早稲田大学考古学研究会によって静岡県西部から愛知県東部における縄文時代後・晩期の遺跡踏査が行われ、昭和 41 ～ 43 年には、静岡県浜松市天竜区水窪町の向市場遺跡や、設楽町内では神田中向遺跡（昭和 41 年 3 月）、神谷沢遺跡（昭和 42 年 3 月）、下谷（大名倉）遺跡（昭和 43 年 3 月）、麦田遺跡（昭和 43 年）において発掘調査と報告がなされている【桜井・平野 1966・1968・1971】。

早稲田大学による発掘調査は、段丘面の北端で行われ、道路を挟んで西側の A・B 区と東側耕作地の C 区でトレンチが設定されている（図 4）。A・B 区では黒色土などがみられたものの撹乱が及んでいたのに対し、C 区では礫の多い黒色土が堆積しており、同層から土器が多数出土したことから包含層と認識され、計 8 か所のトレンチ調査がなされている。土器の多くは縄文時代後期に相当する【平野 2005】。なお、この頃までは大字大名倉地内の字下谷をもって「下谷遺跡」と呼ばれていたが、昭和 43 年刊行の『北設楽郡史』からは「大名倉遺跡」の遺跡名に変更されている【岡田ほか 1968】。

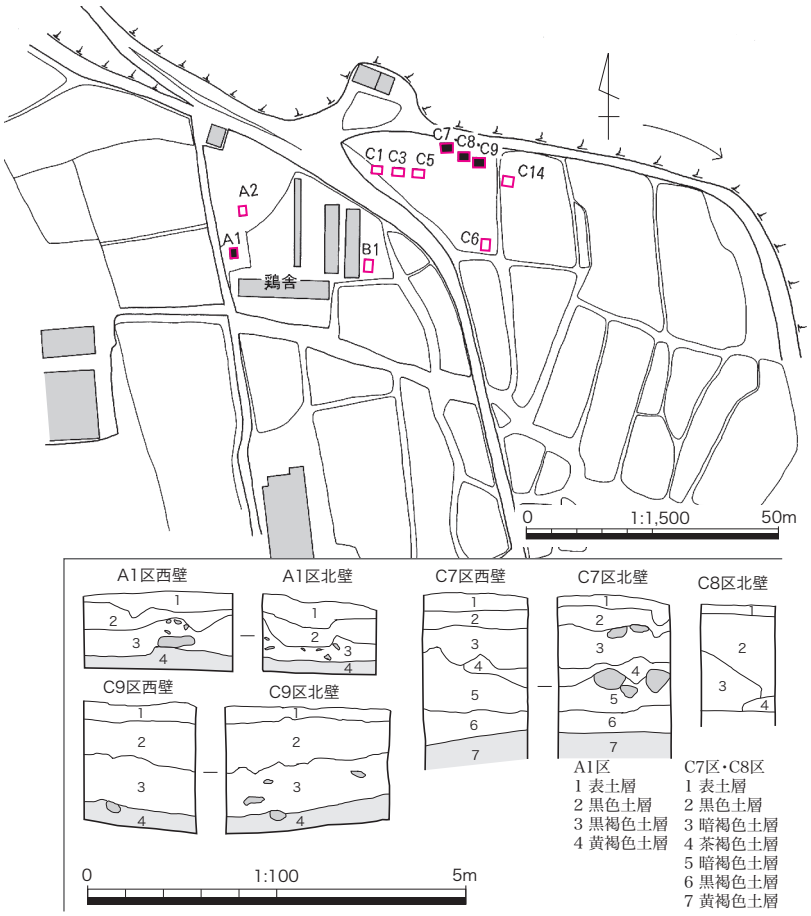


図 4　早稲田大学考古学研究会の発掘調査地点（平野 2005 を改変）

**（3）愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査**

『北設楽郡史』刊行から 30 年以上の間は、大名倉遺跡を含む設楽町内における考古学的調査の進展はなかった。しかし設楽ダム建設工事が具体化してくると、愛知県教育委員会は該当地域における詳細遺跡分布調査を行い、各遺跡の推定範囲を明示した遺跡地図を作成した【愛知県教育委員会 2007】。またそれと同じ頃から愛知県埋蔵文化財センターでは、国

土交通省からの委託事業として設楽ダム関連遺跡の範囲確認調査を開始した。大名倉遺跡では、平成 19・20・25 ～ 28 年度に実施されている。

範囲確認調査は、1m×2m を基本とするトレンチ（テストトレンチ =T.T.）によって、遺跡の各所を試掘していく調査手法である。大名倉遺跡における範囲確認調査は、構造物や土地利用の状況によって調査不能な地点以外で行われ、推定遺跡範囲約 53,300 ㎡に対して 223 地点のトレンチ（総計 516 ㎡）による調査がなされている（図 5）。

## 4．範囲確認調査の概要

範囲確認調査の目的は、主に地表面の地形観察と遺物散布状況から推定された遺跡の範囲をより明確化することにある。具体的には、(1) 遺構・遺物を検出し、遺構面と遺物包含層の所在と規模を明らかにすることと、(2) 可能な限り基盤層を検出して遺跡の原地形の理解につなげることの 2 者に重点が置かれる。特に (1) については、トレンチ調査の可能区域が限られることや撹乱などによって該当地点のみが滅失している場合もあるので、隣接するトレンチの調

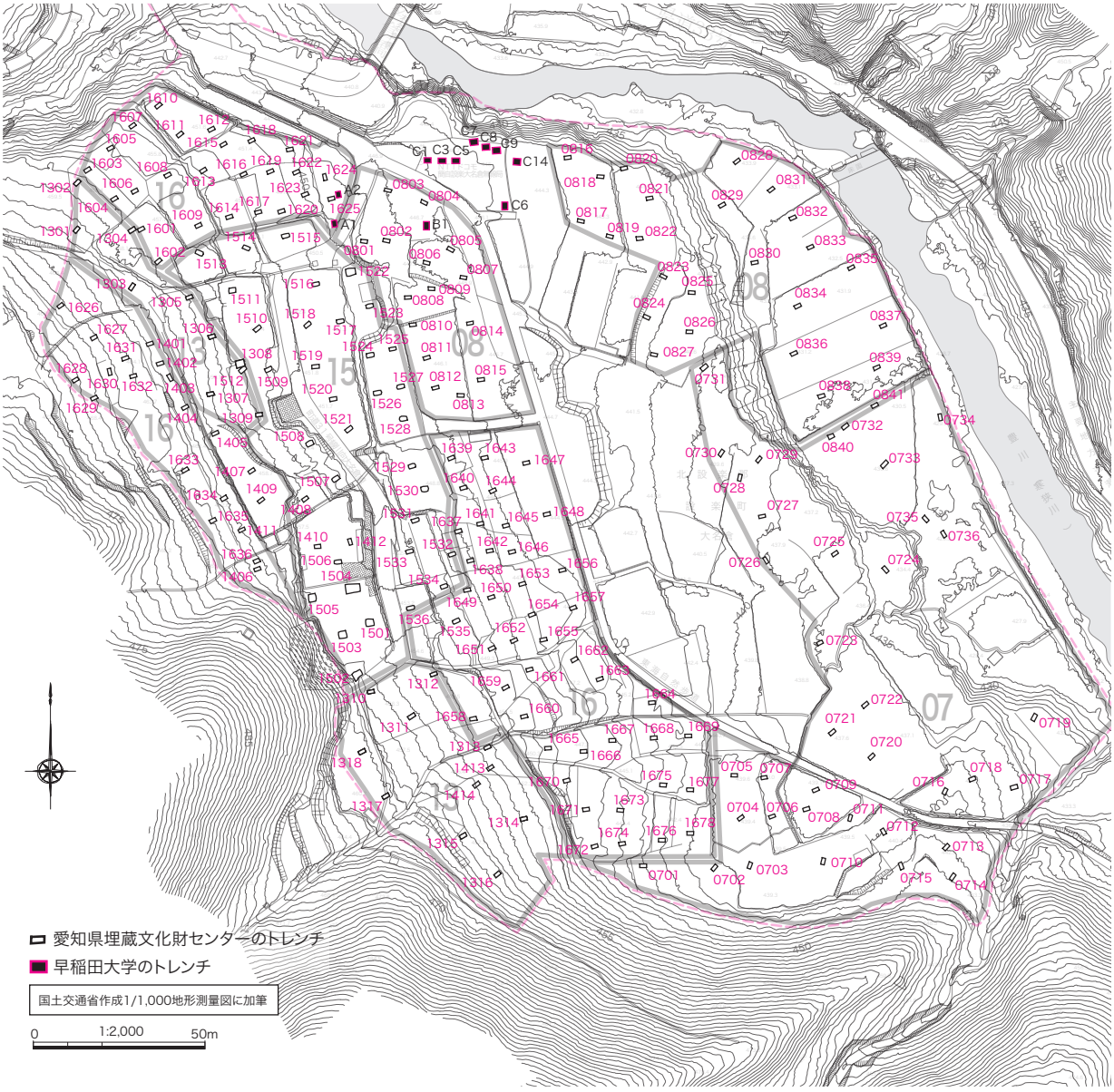


図 5　大名倉遺跡における発掘調査トレンチ配置

査成果を援用して状況を理解する必要がある。以下、年度ごとに概括する。なおトレンチ名は調査年（西暦下２桁）＋各年度の番号の４桁で表示している（表１・2）。

**平成 19 年度**　遺跡南端の丘陵端部から氾濫原を対象とし、出土遺物はわずかである。丘陵端部では基盤層面で湧水がよくみられる。また氾濫原は巨礫混じりの砂層となっている。

**平成 20 年度**　遺跡北部の段丘面と氾濫原を対象とし、段丘面では早稲田大学調査地点 B1 付近から多量の土器が出土している。土器はトレンチ上層からも多数みられるが、近世陶器も混じっているので後世の撹乱を受けている可能性が高い。それに対して砂質の段丘面基盤層直上の黒色・黒褐色土層は混入がないことから縄文時代の包含層と位置付けられる。

**平成 25 年度**　遺跡西部の斜面地が対象である。北端 (T.T.1301・1302) と南端（T.T.1311 ～ 1313）で土石流に関わる角礫主体の層がみられる。縄文土器は出土していない。

**平成 26 年度**　前年度と同様の地形が対象で、近世陶磁器の出土が目立つが、戦国時代の陶器も混じっている。

**平成 27 年度**　遺跡北西部の緩斜面地が対象である。当該地点は地表面から基盤層までが深くなる傾向にあり、耕作土・造成層下の黒色土層が数層に分かれる。その上層は礫が極端に少なく、対して下層では礫が多い。T.T.1515 では下層に掘り込まれた遺構とそれらを覆う上層の関係が明らかである。

**平成 28 年度**　遺跡の北端と中・南部が対象である。中部（T.T.1639 ～ 1657）は広範囲に削平されており、出土遺物もない。南部（T.T.1658 ～ 1678）は土石流堆積である。一方北端では土石流堆積は T.T.1603 ～ 1609 にとどまり、厚い黒色土が検出される傾向にあるが、平成 27 年度同様にその上部は比較的新しい時期の可能性がある。下層では早期の土器が出土し、T.T.1625 では土器埋設遺構から後期初頭の深鉢底部が出土している。　（永井邦仁）

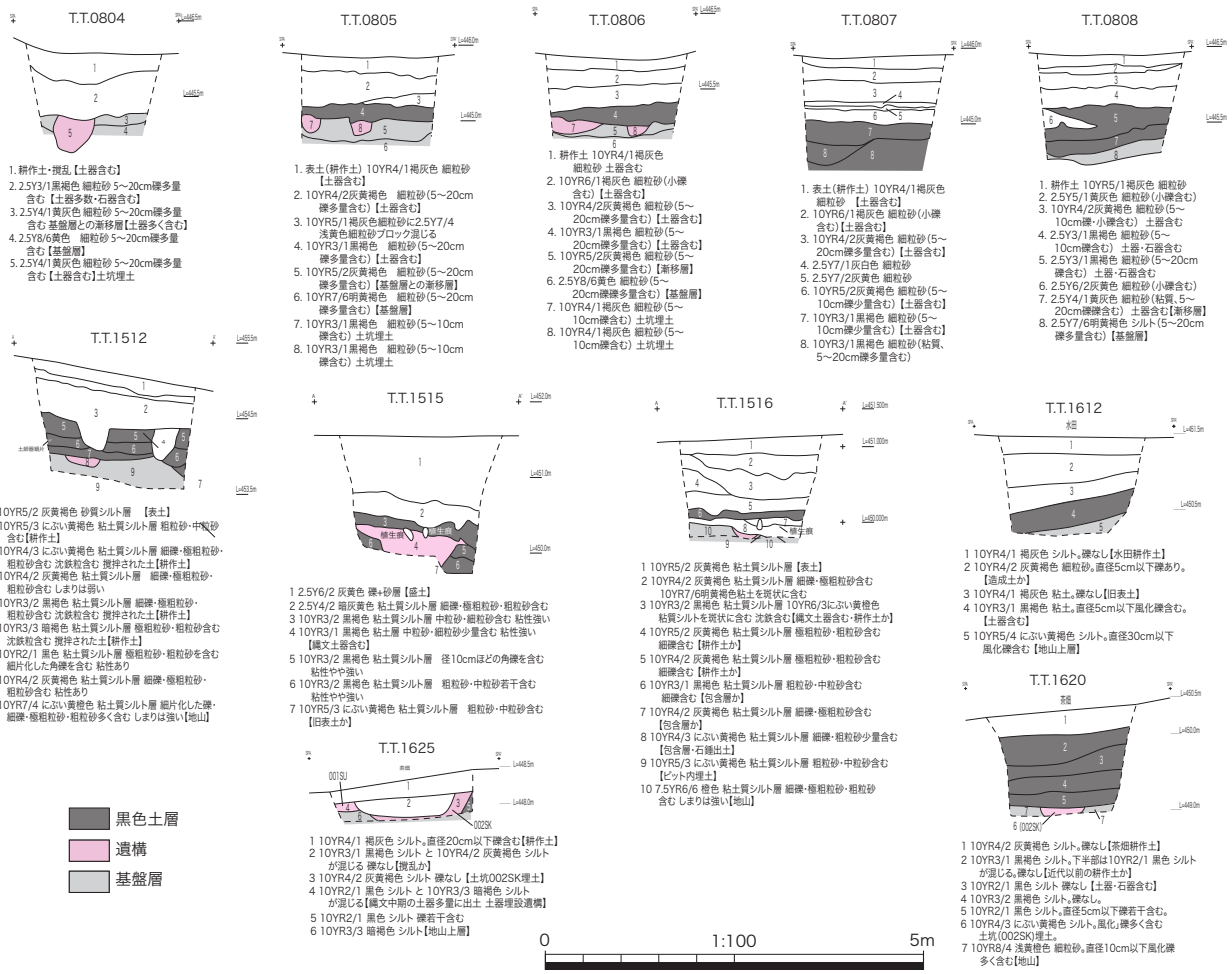


図６　主なテストトレンチの土層断面

表１　範囲確認調査トレンチ一覧（平成 19・20・25・26 年度）

| T.T. | 面積(㎡) | 地表標高(m) | 基盤層面標高(m) | 遺構 | 遺物 | 基盤層(礫含む) | 地形 | 土層概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0701 | 2㎡ | 442.9 | 442.5 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端の谷 | 表土（灰オリーブ色シルト）+2層 |
| 0702 | 2㎡ | 440.1 | 439.6 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0703 | 2㎡ | 439.2 | 438.9 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0704 | 2㎡ | 439.2 | 438.8 | なし | なし | にぶい黄色シルト,湧水 | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0705 | 2㎡ | 439.2 | 438.8 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0706 | 2㎡ | 438.4 | 438.0 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0707 | 2㎡ | 438.6 | 438.2 | なし | なし | 灰黄色シルト | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0708 | 2㎡ | 437.7 | 437.1 | なし | なし | 灰黄色シルト | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0709 | 2㎡ | 437.7 | 437.0 | なし | なし | 灰黄色シルト | 丘陵端の谷 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+2層 |
| 0710 | 2㎡ | 439.4 | 438.6 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+3層 |
| 0711 | 2㎡ | 438.7 | 438.4 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端の谷 | 表土（灰オリーブ色シルト）+1層 |
| 0712 | 2㎡ | 440.1 | 439.9 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト）+1層 |
| 0713 | 2㎡ | 441.9 | 441.6 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト）+1層 |
| 0714 | 2㎡ | 442.9 | 442.6 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト）+1層 |
| 0715 | 2㎡ | 442.5 | 442.1 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト）+1層 |
| 0716 | 2㎡ | 439.6 | 439.4 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト） |
| 0717 | 2㎡ | 440.1 | 436.9 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト） |
| 0718 | 2㎡ | 439.0 | 438.8 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト） |
| 0719 | 2㎡ | 433.5 | 433.3 | なし | なし | 浅黄色シルト | 丘陵端 | 表土（灰オリーブ色シルト） |
| 0720 | 2㎡ | 436.9 | 436.7 | なし | なし | 灰黄色シルト | 谷地形 | 水田耕作土（褐灰色シルト） |
| 0721 | 2㎡ | 436.9 | 436.1 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 谷地形 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+3層 |
| 0722 | 2㎡ | 436.9 | 436.7 | なし | なし | 灰黄色シルト | 谷地形 | 水田耕作土（褐灰色シルト） |
| 0723 | 2㎡ | 436.8 | 436.2 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 谷地形 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+2層 |
| 0724 | 2㎡ | 434.1 | 433.8 | なし | なし | 灰白色中粒砂 | 段丘崖 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0725 | 2㎡ | 436.7 | 435.8 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 段丘崖 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+2層 |
| 0726 | 2㎡ | 437.9 | 437.6 | なし | 土器片×2(常滑産赤物？) | 灰白色中粒砂 | 谷地形 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0727 | 2㎡ | 437.7 | 437.4 | なし | なし | 灰黄色シルト | 段丘面 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0728 | 2㎡ | 438.4 | 437.9 | なし | なし | 灰黄色シルト,湧水 | 段丘面 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0729 | 2㎡ | 438.2 | 437.9 | なし | なし | 浅黄色シルト | 段丘面 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0730 | 2㎡ | 439.2 | 438.7 | なし | なし | 灰白色中粒砂 | 段丘面 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+2層 |
| 0731 | 2㎡ | 439.8 | 439.1 | なし | なし | 灰黄色シルト | 段丘崖,谷地形 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+2層 |
| 0732 | 2㎡ | 430.4 | 430.0 | なし | なし | 灰白色中粒砂 | 氾濫原 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0733 | 2㎡ | 430.1 | 429.2 | なし | なし | 灰白色中粒砂 | 氾濫原 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0734 | 2㎡ | 429.3 | 429.1 | なし | なし | 灰白色中粒砂 | 氾濫原 | 畑耕作土（灰色中粒砂）＋1層 |
| 0735 | 2㎡ | - | - | なし | なし | 未検出,湧水 | 氾濫原 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+1層 |
| 0736 | 2㎡ | 428.9 | 428.5 | なし | なし | 灰白色中粒砂 | 氾濫原 | 水田耕作土（褐灰色シルト）+2層 |
| 0801 | 2㎡ | 447.7 | 446.7 | なし | 磨石１ | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土？ |
| 0802 | 2㎡ | 447.6 | 446.1 | なし | 土器７ | （未検出） | 丘陵端 | 耕作土/撹乱/黒褐色細粒砂(上は礫少なく遺物包含,下は礫多い)×2層 |
| 0803 | 2㎡ | 447.8 | 446.2 | なし | 縄文土器５ | 黄褐色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土/黒褐色細粒砂(礫あり)/黄灰色細粒砂 |
| 0804 | 2㎡ | 445.3 | 445.2 | 土坑２ | 縄文土器×51（後期後半～晩期）,敲石×１,石器剥片×2 | 黄色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土/黒褐色シルト(遺物多数包含,礫多い)/黄灰色細粒砂 |
| 0805 | 2㎡ | 445.9 | 444.8 | 土坑 | 縄文土器×5 |  | 段丘面 | 耕作土/造成土？(灰黄褐色細粒砂,遺物包含),黒褐色細粒砂(礫多い,遺物包含) |
| 0806 | 2㎡ | 446.2 | 445.2 | 土坑 | 縄文土器×12(後期後半～晩期),近世陶磁器×1 | 黄色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土/造成土?(遺物包含)/黒褐色細粒砂(礫多い,遺物包含),灰黄褐色細粒砂 |
| 0807 | 2㎡ | 446.1 | 444.6- | 土坑 | 縄文土器×37,近世陶磁器×1,敲石×2 | （未検出） | 谷地形か | 耕作土/造成土?(遺物包含)/黒褐色細粒砂(上は礫少なく遺物包含,下は礫多い) |
| 0808 | 2㎡ | 446.8 | 445.3 | なし | 縄文土器×5,敲石×1,石器剥片×1 | 明黄褐色シルト | 谷地形か | 耕作土/造成土?(遺物包含)/黒褐色細粒砂(上は10cm以下礫,下は20cm以下礫,ともに遺物包含),黄灰色細粒砂 |
| 0809 | 2㎡ | 446.4 | 444.8 | なし | 縄文土器×53(後期後半～晩期),近世陶磁器×3,磨石敲石×4,石器剥片×5 | （未検出） | 丘陵端 | 耕作土/造成土(遺物包含)/黒褐色細粒砂(20cm以下礫,遺物包含)/オリーブ褐色細粒砂(10cm以下礫多い) |
| 0810 | 2㎡ | 446.4 | 444.9 | 土坑 | 縄文土器×3,近世陶磁器×1,石核×1,石器剥片１ | 明黄褐色シルト | 谷地形か | 耕作土/黒褐色細粒砂/褐灰色細粒砂 |
| 0811 | 2㎡ | 446.2 | 445.2 | 土坑 | なし | 明黄褐色細粒砂 | 谷地形か | 耕作土/造成土?/黒褐色細粒砂 |
| 0812 | 2㎡ | 446.5 | 445.4 | 土坑 | 近世陶磁器×3 | 明黄褐色細粒砂 | 谷地形か | 耕作土/造成土?(近世包含) |
| 0813 | 2㎡ | 446.2 | 445.0 | 土坑 | なし | 明黄褐色細粒砂 | 谷地形か | 耕作土/造成撹乱?(黄灰色細粒砂) |
| 0814 | 2㎡ | 445.3 | 444.0- | なし | 縄文土器×2 | （未検出） | 段丘面か | 耕作土/造成撹乱？/旧表土？（黒褐色細粒砂) |
| 0815 | 2㎡ | 445.4 | 444.2 | 土坑 | なし | 明黄褐色細粒砂 | 谷地形か | 耕作土/造成撹乱？（黄灰色細粒砂) |
| 0816 | 2㎡ | 443.0 | 442.1 | なし | 磨石？×1 | （未検出） | 段丘崖 | 耕作土/造成土? |
| 0817 | 2㎡ | 443.1 | 442.6 | なし | 縄文土器×3,石器剥片×1 | 明黄褐色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土(削平地) |
| 0818 | 2㎡ | 443.3 | 442.4 | なし | なし | 黄色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土(削平地) |
| 0819 | 2㎡ | 442.9 | 441.4 | なし | 縄文土器×7(晩期) | 黄色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土(削平地) |
| 0820 | 2㎡ | 441.9 | 441.3 | なし | 縄文土器×1 | 黄色細粒砂 | 段丘崖 | 耕作土/巨円礫多い |
| 0821 | 2㎡ | 441.7 | 440.9 | なし | なし | 灰白色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土/巨円礫多い |
| 0822 | 2㎡ | 441.6 | 441.0 | 土坑（礫抜痕？） | なし | 黄橙色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土(削平地) |
| 0823 | 2㎡ | 441.4 | 440.7 | なし | 石核1 | 灰白色細粒砂 | 段丘面 | 耕作土/巨礫多い |
| 0824 | 2㎡ | 441.1 | 440.4 | なし | なし | 明黄褐色シルト,湧水あり | 段丘崖 | 耕作土/褐灰色細粒砂 |
| 0825 | 2㎡ | 440.8 | 440.2 | なし | なし | 灰白色細粒砂 | 谷地形 | 耕作土/巨礫多い |
| 0826 | 2㎡ | 440.5 | 439.8 | なし | なし | （未検出）,湧水あり | 谷地形 | 耕作土/褐灰色シルト |
| 0827 | 2㎡ | 440.7 | 440.1 | なし | なし | （未検出）,湧水あり | 谷地形 | 耕作土/褐灰色シルト |
| 0828 | 2㎡ | 440.2 | 439.0 | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 耕作土/オリーブ黄色細粒砂(巨円礫含む) |
| 0829 | 2㎡ | 434.4 | 433.0 | なし | 縄文土器×3,近世陶磁器１ | （未検出）,湧水あり | 段丘崖 | 耕作土/灰オリーブ色細粒砂(巨円礫含む) |
| 0830 | 2㎡ | 433.2 | 432.8 | なし | なし | （未検出）,湧水あり | 氾濫原 | 水田耕作土(削平地) |
| 0831 | 2㎡ | 433.0 | 432.1 | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/オリーブ色細粒砂 |
| 0832 | 2㎡ | 432.6 | 431.7- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰オリーブ色細粒砂/灰白色中粒砂 |
| 0833 | 2㎡ | 432.4 | 431.0- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰オリーブ色細粒砂/灰白色中粒砂 |
| 0834 | 2㎡ | 431.7 | 430.8- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰オリーブ色細粒砂 |
| 0835 | 2㎡ | 431.9 | 431.0- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰黄褐色細粒砂/黄褐色中粒砂(巨円礫含む) |
| 0836 | 2㎡ | 431.3 | 430.3- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰オリーブ細粒砂(巨円礫含む) |
| 0837 | 2㎡ | 431.2 | 430.4- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/暗黄灰色中粒砂(巨円礫含む) |
| 0838 | 2㎡ | 430.8 | 429.5- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰白色中粒砂(巨円礫含む) |
| 0839 | 2㎡ | 447.9 | 446.8- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰白色中粒砂(巨円礫含む) |
| 0840 | 2㎡ | 430.4 | 429.4- | なし | 土器×１ | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/灰オリーブ色中粒砂(巨円礫含む) |
| 0841 | 2㎡ | 430.4 | 429.5- | なし | なし | （未検出） | 氾濫原 | 水田耕作土/にぶい黄橙色中粒砂(巨円礫含む) |
| 1301 | 2㎡ | 460.5 | 459.7- | なし | なし | （未検出） | 山崩れ | 耕作土（黒褐色シルト）/灰褐色礫/黒色土 |
| 1302 | 2㎡ | 460.5 | 459.8- | ピット×2 | なし | （未検出） | 山崩れ | 耕作土（黒褐色シルト）/灰褐色礫 |
| 1303 | 2㎡ | 460.6 | 460.3 | なし | なし | 粘土 | 小尾根 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1304 | 2㎡ | 457.7 | 456.8 | なし | なし | 粘土 | 谷地形？ | 耕作土(黒褐色礫)/黒色シルト |
| 1305 | 2㎡ | 458.0 | 457.8 | なし | 近世陶器,現代磁器 | 粘土 | 丘陵端 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1306 | 2㎡ | 457.2 | 456.7 | ピット | なし | 粘土 | 丘陵端 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1307 | 2㎡ | 458.0 | 457.8 | ピット×2 | なし | 粘土 | 丘陵端 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1308 | 5㎡ | 455.4 | 454.5 | ピット、礎石？ | 礎石【地山直上】 | 粘土 | 丘陵端 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1309 | 2㎡ | 455.0 | 453.8 | なし | なし | 粘土 | 丘陵端 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1310 | 2㎡ | 456.5 | 456.3 | ピット | 近世磁器 | 粘土 | 丘陵端 | 耕作土(黒褐色シルト) |
| 1311 | 2㎡ | 455.5 | 455.1- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 灰褐色礫/土石流堆積(礫多い) |
| 1312 | 2㎡ | 453.4 | 452.7- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 灰褐色礫/土石流堆積(礫多い) |
| 1313 | 2㎡ | 455.5 | 454.9 | なし | なし | 礫 | 丘陵端 | 灰褐色礫 |
| 1314 | 2㎡ | 452.7 | 452.5 | ピット×3 | 近世磁器 | 粘土 | 丘陵端 | 灰褐色土 |
| 1315 | 2㎡ | 457.9 | 456.8 | なし | 近世陶器【灰黄褐色シルト層】 | 粘土 | 丘陵端 | 灰褐色土 |
| 1316 | 2㎡ | 455.6 | 455.2 | 落ち込み地形 | なし | 粘土 | 丘陵端 | 灰褐色土 |
| 1317 | 2㎡ | 460.0 | 459.7 | ピット×2 | なし | 粘土 | 丘陵端 | 表土（黒褐色土） |
| 1318 | 2㎡ | 460.0 | 459.6 | 土坑 | 近世陶磁器 | 粘土 | 丘陵端 | 表土（黒褐色土） |
| 1401 | 2㎡ | 461.8 | 460.9 | なし | 近世陶磁器×1(美濃産染付19世紀),近代陶器×1（常滑産） | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 畑耕作土/黒褐色細粒砂 |
| 1402 | 2㎡ | 461.5 | 460.8 | 土坑1 | 近世陶磁器×3(瀬戸産こね鉢,美濃灯明皿,関西系白磁) | 褐色シルト | 丘陵端 | 畑耕作土/黒褐色細粒砂 |
| 1403 | 2㎡ | 461.4 | 460.7 | なし | 近世陶磁器×4(美濃産箱形湯呑,関西系染付皿,猪口) | 褐色シルト | 丘陵端 | 畑耕作土/黒褐色細粒砂 |
| 1404 | 2㎡ | 461.1 | 460.6- | なし | 近世陶磁器×3(美濃産箱形湯呑,関西系染付碗)近代陶磁器×8点 | （未検出） | 丘陵端 | 畑耕作土/＊竹根により掘削不能 |
| 1405 | 2㎡ | 458.8 | 458.1 | なし | 戦国陶磁器×2(常滑産,土師器皿か),近世陶磁器×2(瀬戸産擂鉢,灰釉碗),近代陶磁器×5点,不明×2 | 褐色シルト | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土(灰白色粘土) |
| 1406 | 2㎡ | 461.7 | 460.8 | なし | なし | オリーブ褐色細粒砂 | 丘陵端の谷地形 | 耕作土/黄褐色細粒砂 |
| 1407 | 2㎡ | 458.6 | 458.0 | なし | 室町陶器×1(古瀬戸後期四耳壺),近世×2(関西系染付) | 暗褐色細粒砂 | 丘陵端 | 水田耕作土/灰黄褐色シルト |
| 1408 | 2㎡ | 456.2 | 454.6- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端の谷地形 | 灰黄褐色細粒砂/黄褐色細粒砂 |
| 1409 | 2㎡ | 458.5 | 458.0 | なし | 石器×1(大潟剥片),近世陶磁器×2(瀬戸産こね鉢18～19世紀、肥前産染付箱形湯呑),近代陶器×1 | 黄褐色シルト | 丘陵端 | 水田耕作土/灰黄褐色細粒砂 |
| 1410 | 2㎡ | 455.4 | 453.7- | なし | 近世陶磁器×1(瀬戸・美濃窯産染付広東茶碗19世紀) | （未検出） | 丘陵端の谷地形 | 表土/黄褐色細粒砂 |
| 1411 | 2㎡ | 461.2 | 460.5 | なし | なし | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 表土(褐色極細粒砂)/にぶい黄褐色細粒砂 |
| 1412 | 2㎡ | 455.2 | 453.5- | なし | なし | （未検出） | 谷地形 | 表土(灰黄褐色シルト)ほか4層 |
| 1413 | 2㎡ | 452.9 | 452.4 | なし | なし | 黄褐色シルト | 丘陵端 | 表土（褐色細粒砂) |
| 1414 | 2㎡ | 454.9 | 454.8 | なし | なし | 黄褐色シルト | 丘陵端 | 表土（褐色細粒砂) |

表２　範囲確認調査トレンチ一覧（平成 27・28 年度）

| T.T. | 面積(㎡) | 地表標高(m) | 基盤層面標高(m) | 遺構 | 遺物 | 基盤層(礫含む) | 地形 | 土層概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1501 | 4㎡ | 455.3 | 453.7- | なし | 近代陶磁器 | （未検出） | 丘陵端 | 造成土/旧表土 |
| 1502 | 4㎡ | 455.3 | 454.2- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 造成土 |
| 1503 | 4㎡ | 457.0 | 455.3- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 造成土 |
| 1504 | 8㎡ | 455.2 | 454.0 | なし | 近世陶器,砥石 | 浅黄色粘質シルト | 丘陵端 | 近世後半以降の耕作土 |
| 1505 | 2㎡ | 455.3 | 455.1 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 造成土 |
| 1506 | 2㎡ | 455.4 | 454.2 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 造成土/土石流堆積(10cm以上礫あり) |
| 1507 | 2㎡ | 452.9 | 452.6 | なし | 近代陶磁器 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 表土/土石流堆積(10cm以上礫あり) |
| 1508 | 2㎡ | 453.4 | 453.0 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 表土/土石流堆積(50cm以上礫あり) |
| 1509 | 2㎡ | 453.6 | 452.6 | なし | なし | にぶい黄橙色粘質シルト | 丘陵端 | 表土/暗褐色粘質シルト/黒褐色シルト(礫少ない) |
| 1510 | 2㎡ | 454.2 | 452.9- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 耕作土(造成土下旧耕作土)の下まで掘削達せず |
| 1511 | 2㎡ | 454.3 | 453.7- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 表土_土石流堆積(10cm以上角礫多い) |
| 1512 | 2㎡ | 455.1 | 454.0 | なし | 戦国土師器鍋 | にぶい黄橙色粘質シルト | 丘陵端 | 近世後半以降の耕作土/黒褐色シルト/暗褐色シルト(戦国期土器包含)/黒色粘質シルト |
| 1513 | 2㎡ | 460.0 | 455.2- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 表土/造成土/土石流堆積 |
| 1514 | 2㎡ | 453.1 | 452.2- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土/旧耕作土/土石流堆積(50cm以上礫含む) |
| 1515 | 2㎡ | 451.5 | 449.7- | なし | 縄文土器 | （未検出） | 丘陵端 | 造成土/黒褐色粘質シルト(縄文土器包含)×4層 |
| 1516 | 2㎡ | 451.1 | 449.8 | ピット2・土坑1（竪穴建物跡か） | 縄文土器（中or後期）,打欠石錘,黒曜石剥片 | 橙色粘土質シルト | 丘陵端 | 造成土/旧耕作土(縄文土器包含)/灰黄褐色シルト/黒褐色シルト(礫少ない)/にぶい黄褐色シルト(石錘包含) |
| 1517 | 2㎡ | 451.1 | 449.6 | 土坑?1 | 石器 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 造成土/旧耕作土/にぶい黄褐色シルト(遺物包含) |
| 1518 | 2㎡ | 451.1 | 450.3 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 造成土/旧耕作土？(黒褐色シルト)/にぶい黄褐色シルト |
| 1519 | 2㎡ | 451.2 | 450.6 | なし | なし | にぶい黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 表土(灰黄褐色シルト) |
| 1520 | 2㎡ | 451.1 | 450.2 | なし | なし | にぶい黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 表土(灰黄褐色シルト)/明褐色シルト/黒褐色シルト |
| 1521 | 2㎡ | 451.1 | 450.2 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 表土(灰黄褐色シルト)/灰黄褐色シルト(10cm礫含む) |
| 1522 | 2㎡ | 449.4 | 447.6 | なし | 近代陶器 | 灰白色砂 | 丘陵端 | 造成土/旧耕作土 |
| 1523 | 2㎡ | 449.2 | 447.7 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 造成土 |
| 1524 | 2㎡ | 447.7 | 446.2 | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 攪乱 |
| 1525 | 2㎡ | 447.3 | 446.0 | なし | 縄文土器・近世陶器 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 造成土(灰黄褐色シルト)/黒褐色シルト(礫少ない,遺物包含)×2層 |
| 1526 | 2㎡ | 447.5 | 446.5- | なし | 近世後半以降陶器 | （未検出） | 丘陵端 | 土坑状攪乱 |
| 1527 | 2㎡ | 447.3 | 446.2- | ピット1 | 縄文土器 | （未検出） | 丘陵端 | 造成土/黒褐色シルト(遺物包含) |
| 1528 | 2㎡ | 447.3 | 446.7- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 造成土/旧耕作土/土石流堆積(50cm角礫多い) |
| 1529 | 2㎡ | 448.6 | 447.8- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 造成土/土石流堆積(10cm以上礫多い) |
| 1530 | 2㎡ | 448.5 | 448.3- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 攪乱/土石流堆積(10cm礫多い) |
| 1531 | 2㎡ | 450.1 | 449.5- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり) |
| 1532 | 2㎡ | 448.7 | 447.9- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり) |
| 1533 | 2㎡ | 451.0 | 450.3- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり) |
| 1534 | 2㎡ | 450.1 | 448.5- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり) |
| 1535 | 2㎡ | 450.7 | 450.0- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 旧耕作土/土石流堆積(10cm角礫あり) |
| 1536 | 2㎡ | 453.6 | 451.8- | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 造成土/旧表土？ |
| 1601 | 2㎡ | 457.8 | 456.7 | なし | 近世後半陶器 【1層】 | （未検出） | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土/旧表土 |
| 1602 | 2㎡ | 457.8 | 457.5 | なし | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土 |
| 1603 | 2㎡ | 457.3 | 456.1 | なし | なし | 浅黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/造成土/旧表土 |
| 1604 | 2㎡ | 457.5 | 456.5 | なし | なし | 浅黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/造成土/旧表土 |
| 1605 | 2㎡ | 455.5 | 455.1 | なし | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/旧表土 |
| 1606 | 2㎡ | 456.3 | 455.7 | なし | なし | 浅黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/旧表土 |
| 1607 | 2㎡ | 453.7 | 453.1 | なし | なし | 浅黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/土石流堆積(50cm以下角礫多い) |
| 1608 | 2㎡ | 454.5 | 453.8 | なし | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/造成土/旧表土 |
| 1609 | 2㎡ | 454.5 | 453.8 | なし | なし | 浅黄橙色粘土 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/旧表土 |
| 1610 | 2㎡ | 451.5 | 451.2 | なし | なし | 浅黄橙色中粒砂 | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土 |
| 1611 | 2㎡ | 451.5 | 450.9 | なし | なし | 浅黄橙色中粒砂 | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土 |
| 1612 | 2㎡ | 451.5 | 450.4 | 土坑1、ピット1 | 縄文早期押型文土器×1、剥片 【4層】 | にぶい黄褐色シルト | 丘陵端 | 水田耕作土/造成土/旧表土/黒褐色粘土（遺物包含） |
| 1613 | 2㎡ | 452.2 | 451.9 | 土坑×1,ピット×2 | なし | 黄橙色細粒砂 | 丘陵端谷地形 | 畑耕作土/黒褐色シルト(遺構埋土) |
| 1614 | 2㎡ | 452.4 | 451.3 | 土坑×2 | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 水田耕作土_旧表土/黒褐色粘質シルト(礫なし)/黒色粘質シルト |
| 1615 | 2㎡ | 450.7 | 450.0 | 土坑 | 石器？ | 明黄褐色細粒砂 | 丘陵端 | 茶畑耕作土/造成土 |
| 1616 | 2㎡ | 450.9 | 450.4 | なし | なし | にぶい黄橙色細粒砂 | 丘陵端谷地形 | 耕作土/旧表土 |
| 1617 | 2㎡ | 451.1 | 449.9 | ピット×2 | 縄文土器？小片 【ピット】 縄文土器×2 【3層】 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/旧表土/黒褐色シルト(遺物包含) |
| 1618 | 2㎡ | 449.6 | 449.1 | ピット×1 | なし | 明黄褐色砂質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1619 | 2㎡ | 450.1 | 449.3 | | なし | 明黄褐色砂質シルト | 丘陵端谷地形 | - |
| 1620 | 2㎡ | 450.4 | 449.1 | ピット1,土坑×1,落ち込み×1 | 縄文土器1点 【検出面】、縄文土器6点 【3層】、磨石？ 【3層】 | 浅黄橙色細粒砂 | 丘陵端谷地形 | 耕作土/黒色シルト(礫なし,遺物包含) |
| 1621 | 2㎡ | 448.8 | 448.5 | なし | なし | 明黄褐色細粒砂 | 丘陵端谷地形 | 耕作土/造成土 |
| 1622 | 2㎡ | 449.2 | 448.9 | ピット×5 | なし | 明黄褐色細粒砂 | 丘陵端谷地形 | 耕作土/黒褐色シルト(礫少ない) |
| 1623 | 2㎡ | 449.1 | 448.5 | ピット×1 | 縄文土器×1 【2層】,石器剥片 | 黄橙色細粒砂 | 丘陵端谷地形 | 耕作土/造成土/黒褐色シルト(礫なし) |
| 1624 | 2㎡ | 448.2 | 448.0 | ピット×2 | なし | 明黄褐色砂質シルト | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1625 | 2㎡ | 448.3 | 447.9 | 土器埋設遺構001SX | 擂石？×1,剥片？×1 【1層】,縄文中期土器多数 【001SX】 | 暗褐色シルト | 丘陵端 | 耕作土/黒色シルト(礫少ない,遺物包含,001SX) |
| 1626 | 2㎡ | 465.2 | 465.0 | なし | なし | 黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1627 | 2㎡ | 465.0 | 464.9 | なし | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1628 | 2㎡ | 468.1 | 467.8 | なし | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1629 | 2㎡ | 466.9 | 466.3 | なし | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 耕作土/造成土/灰黄褐色シルト(遺構) |
| 1630 | 2㎡ | 464.8 | 464.1 | 土坑×2 | 近世～近代陶磁器×2 | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 耕作土/造成土/灰黄褐色シルト(遺構) |
| 1631 | 2㎡ | 463.8 | - | 土坑×2 | なし | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1632 | 2㎡ | 463.8 | 462.7 | 土坑×1 | 近世磁器×1 【2層】 | （未検出） | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1633 | 2㎡ | 462.6 | 462.2 | なし | 近代磁器×1 【1層】 | 黄橙色粘土 | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1634 | 2㎡ | 460.6 | 459.7 | なし | 近世陶器×1 【2層】 | 黄褐色粘土 | 丘陵端 | 耕作土/造成土/旧表土 |
| 1635 | 2㎡ | 462.6 | 461.3 | なし | 戦国陶器×1(瀬戸・美濃窯産端反皿) 【1層】 | にぶい黄褐色シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/角礫多い土石流堆積 |
| 1636 | 2㎡ | 461.0 | - | なし | 近世？陶器 【1層】 | （未検出） | 丘陵端谷地形 | 耕作土/造成土/角礫多い土石流堆積/沢地形の堆積 |
| 1637 | 2㎡ | 448.0 | 447.4 | 土坑×1 | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/旧表土 |
| 1638 | 2㎡ | 448.0 | 447.4 | 土坑×3 | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/旧表土/灰黄褐色シルト(遺構) |
| 1639 | 2㎡ | 447.0 | 446.2 | なし | 近世陶器 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1640 | 2㎡ | 447.1 | 446.5 | ピット×2 | 近世陶器 【1層】 | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/旧表土 |
| 1641 | 2㎡ | 477.0 | 476.4 | ピット×1 | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/旧表土 |
| 1642 | 2㎡ | 447.0 | 446.4 | 溝×1 | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/旧表土 |
| 1643 | 2㎡ | 445.8 | 445.1 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/旧表土 |
| 1644 | 2㎡ | 446.0 | 445.5 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1645 | 2㎡ | 446.1 | 445.3 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/旧表土 |
| 1646 | 2㎡ | 446.3 | 445.6 | 土坑×1 | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/旧表土 |
| 1647 | 2㎡ | 444.4 | 443.6 | ピット×4 | なし | 明黄褐色粘土 | 丘陵端 | 耕作土/黒褐色粘質シルト(礫なし) |
| 1648 | 2㎡ | 444.4 | 443.7 | 溝×1 | なし | 明黄褐色粘土 | 丘陵端 | 耕作土/黒褐色粘質シルト(礫なし) |
| 1649 | 2㎡ | 449.2 | 448.5 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/黒褐色粘質シルト(礫多い,下方で現代のタイル) |
| 1650 | 2㎡ | 448.4 | 447.7 | なし | 近世～近代磁器 【2層】 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土/黒褐色シルト(礫多い) |
| 1651 | 2㎡ | 449.0 | 448.5 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1652 | 2㎡ | 447.9 | 447.6 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1653 | 2㎡ | 446.5 | 445.8 | なし | なし | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1654 | 2㎡ | 446.7 | 446.2 | なし | なし | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1655 | 2㎡ | 446.5 | 446.1 | なし | なし | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1656 | 2㎡ | 444.8 | 444.0 | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | - |
| 1657 | 2㎡ | 444.8 | 444.4 | なし | なし | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1658 | 2㎡ | 452.5 | 452.3 | なし | なし | にぶい黄橙色シルト | 丘陵端 | 灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1659 | 2㎡ | 449.5 | 448.9 | なし | なし | 明黄褐色シルト | 丘陵端 | 茶畑耕作土/灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1660 | 2㎡ | 450.3 | 449.1 | なし | 近世～近代陶磁器 | 明赤褐色シルト | 丘陵端 | 灰黄褐色シルト/5cm以下礫多い沢の堆積/60cm以下礫多い土石流堆積 |
| 1661 | 2㎡ | 448.3 | - | なし | なし | （未検出） | 丘陵端 | 茶畑耕作土 |
| 1662 | 2㎡ | 446.1 | 445.5 | なし | なし | 明赤褐色シルト | 丘陵端 | 耕作土/灰黄褐色細粒砂(礫多い) |
| 1663 | 2㎡ | 445.4 | 444.8 | なし | なし | 明黄褐色細粒砂 | 丘陵端 | 耕作土/鈍い黄褐色中粒砂(20cm以下角礫多い) |
| 1664 | 2㎡ | 442.9 | 442.3 | なし | なし | にぶい黄褐色シルト | 丘陵端 | 土石流堆積(20cm以下角礫多い灰黄褐色細粒砂)/灰黄褐色シルト(礫なし) |
| 1665 | 2㎡ | 448.3 | 448.0 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1666 | 2㎡ | 446.6 | 445.6 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積(15cm以下角礫多い) |
| 1667 | 2㎡ | 445.3 | 444.1 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積(15cm以下角礫多い) |
| 1668 | 2㎡ | 443.0 | 442.3 | なし | 近世～近代陶磁器 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積(20cm以下角礫多い) |
| 1669 | 2㎡ | 441.6 | 440.9 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積(20cm以下角礫多い) |
| 1670 | 2㎡ | 446.9 | 445.9 | なし | 近世～近代陶磁器 | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積(15cm以下角礫多い) |
| 1671 | 2㎡ | 445.7 | 445.2 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1672 | 2㎡ | 445.5 | 445.1 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/造成土 |
| 1673 | 2㎡ | 443.9 | 443.1 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積 |
| 1674 | 2㎡ | 443.8 | 443.3 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土 |
| 1675 | 2㎡ | 442.6 | 441.6 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積 |
| 1676 | 2㎡ | 441.9 | 441.3 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積 |
| 1677 | 2㎡ | 441.5 | 440.8 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土/土石流堆積 |
| 1678 | 2㎡ | 440.9 | 440.5 | なし | なし | 明黄褐色粘質シルト | 丘陵端 | 耕作土 |

## 5．範囲確認調査出土遺物について

ここでは、大名倉遺跡の出土遺物について、範囲確認調査資料を中心に報告する。

表３は、範囲確認調査出土資料すべての集計結果をトレンチ（以下 T.T.）別に示したものである。集計に際しては、土器・陶器は、時代別に点数と総重量を示している。出土点数が多いところは、黒塗りに白文字で記し、点数は少ないものの大型破片が出土したところには赤字で示した。石器については、器種と出土点数を示した。

T.T.0802 ～ 0809 では、集中して縄文時代後期中葉～後葉の土器が出土している。その一方で、T.T.1516 や 1625 では、中期後半～後期初頭の遺物の出土がまとまっており、周囲の試掘坑でも早期前半～後期初頭までの土器片が大型破片の状態で出土している。剥片や磨石敲石類など縄文時代の石器の出土も、この縄文土器の出土傾向と合致する。

中世から近世（近世でも前半期か）の遺物も散在的に確認できている。これらは、平成 25・26 年度調査で多くまとまって見つかっている。

以下、縄文時代の資料を中心に、出土遺物の報告を行う。

**（A）縄文土器**

**T.T.0802 出土資料（図７　1）**

深鉢胴部片で器壁厚は６～ 7mm である。器面表には横方向に巻貝条痕、裏にも斜方向に巻貝条痕が認められる。縄文時代後期中葉～晩期前半の土器片であるが、後期後葉に属する可能性が高い。

**T.T.0804 出土資料（図７　2 ～ 31）**

深鉢の口縁部片（4 ～ 8）、胴部片（2・3・9 ～ 29）、底部片（30・31）で、胴部片では器壁厚は６～ 8mm である。

2・3 は土坑 A 出土資料である。器面には表裏ともに、ナデ・ミガキが認められる。3 は胴部下半に当たるものか。4 は土坑 B 出土資料である。深鉢口縁部片で、上端には面取りが、端部内面には段の形成が認められる。表面は器面の剥落が著しく調整などは確認できないが、裏面はナデ・ミガキである。いずれも縄文時代後期の資料になると思われるが、5 ～ 31 よりも古相になるかもしれない。

5 ～ 31 は包含層出土資料である。器壁厚は胴部で７～ 9mm 程度であり、いずれにも表裏に巻貝条痕が認められる。5 ～ 8 の口縁部資料では横方向に、胴部に向かっていくにつれて縦あるいは斜方向の調整方向となる。文様が確認できるものは、9 のみと極めて少ない。9 は口縁部に近い部分と考えられるが、横方向に 3 条の凹線が施されている。凹線は幅 5mm 程度と細く、内部にはナデなどは認められない。底部の周囲にはオサエが施されており、作り出すような形状を呈する。9 は後期末の神谷沢・伊川津式の段階と考えられ、その他の破片も後期後葉～末頃のものと考えられる。

**T.T.0805 出土資料（図８　32 ～ 34）**

いずれも深鉢で、32 は口縁部片、33・34 は胴部片である。器壁厚は 32・24 が７～ 9mm であるが、33 のみ 12mm 程度のところもあり、やや厚手である。器面にはやや不明瞭ではあるが、巻貝条痕調整が残されている。縄文時代後期中葉～晩期前半に属するもので、後期後葉～末に属する可能性が高い。

**T.T.0806 出土資料（図８　35・36）**

35 は深鉢片で、胴部下半でも底部付近と考えられる。器壁厚は 20mm 超える部分もある。器面の文様・調整は表裏とも不明瞭であるが、胎土はやや粗く、繊維を含む。縄文時代早期に属するものと考えられる。

36 は胴部片で、器壁厚は 7mm 程度である。器面表裏には横方向に巻貝条痕が認められる。縄文時代後期後葉～末のものであろう。

**T.T.0807 出土資料（図８　37 ～ 45）**

いずれも深鉢で、37 ～ 40 は口縁部片、41 ～ 44 は胴部片である。37 は口縁端部上面に平坦面が形成されるもので、器壁厚が 10mm を超える。器面表裏には、ナデ・ミガキ調整が施される。38 ～ 44 は器壁厚が７～ 9mm で、器面表裏には横方向を主体として巻貝条痕が施されている。45 は底部で、器面にはナデやオサエ痕が認められる。底面の残存はごく一部であるが、編組製品圧痕を確認することができる。38 ～ 44 は縄文時代後期後葉～末のものと推

表３　大名倉遺跡範囲確認調査 試掘坑別出土状況一覧

| 調査年 | TTNo. | 遺構 | 縄文時代 | | | | | | 中世～戦国期 | 中世～近世 | 近世以降 | 石器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 早期前半 | 早期後半 | 中期後半～後期初頭 | 後期中葉～後葉（後葉主体） | 縄文不明 | 縄文晩期？ | 陶器 | ナベ | 陶器・磁器 | |
| 08 | 01 | | | | | | | | | | | 磨石敲石類 1 |
| 08 | 02 | | | | | 7【38.2g】 | | | | | | |
| 08 | 03 | | | | | 5【15.9g】 | | | | | | |
| 08 | 04 | ○ | | | | 51【405.4g】 | | | | | | 破片 2・磨石敲石類 1 |
| 08 | 05 | | | | | 10【45.2g】 | | | | | | |
| 08 | 06 | | | 1【27.5】 | | 12【41.9g】 | | | | | 1【0.9g】 | |
| 08 | 07 | | | | | 37【198.8g】 | | | | | 1【4.1g】 | 磨石敲石類 2 |
| 08 | 08 | | | 1【6.2g】 | | 4【25.4g】 | | | | | | 大型剥片 1・磨石敲石類 1 |
| 08 | 09 | | | | | 54【524.6g】 | | | | | 3【16.3g】 | スクレイパー 2・剥片 2・大型剥片 1・磨石敲石類 4 |
| 08 | 10 | | | | | | 3【7.9g】 | | | | 1【2.2g】 | 剥片 1・大型剥片石核 1・石皿台石類 1 |
| 08 | 12 | | | | | | | | 1【7.7g】 | | 2【6.3g】 | |
| 08 | 14 | | | | | | 2【6.8g】 | | | | | |
| 08 | 16 | | | | | | | | | | | 磨石敲石類 ?1 |
| 08 | 17 | | | | | | 3【8.4g】 | | | | | 剥片 1 |
| 08 | 19 | | | | | 1【4.2g】 | 6【9.8g】 | | | | | |
| 08 | 20 | | | | | | 1【2.6g】 | | | | | |
| 08 | 29 | | | | | 2【63.2g】 | 1【3.0g】 | | | 1【3.7g】 | | |
| 08 | 40 | | | | | | | | | | 1【1.9g】 | |
| 13 | 05 | | | | | | | | | | 5【113.3g】 | |
| 13 | 08 | | | | | | | | | | | 砥石 1 |
| 13 | 10 | | | | | | | | | | 1【1.2g】 | |
| 13 | 14 | | | | | | | | | | 1【4.2g】 | |
| 13 | 15 | | | | | | | | | 1【43.4g】 | | |
| 13 | 18 | | | | | | | | | | 6【46.1g】 | |
| 14 | 01 | | | | | | | | | | 2【41.6g】 | |
| 14 | 02 | | | | | | | | | | 4【71.3g】 | |
| 14 | 03 | | | | | | | | | | 6【28.0g】 | |
| 14 | 04 | | | | | | | | | | 10【48.8g】 | |
| 14 | 05 | | | | | | | | | 1【19.4g】 | 11【140.4g】 | |
| 14 | 07 | | | | | | | | 1【60.7g】 | | 2【4.4g】 | |
| 14 | 09 | | | | | | | | | | 7【76.5g】 | |
| 14 | 10 | | | | | | | | | | 2【25.4g】 | |
| 14 | 14 | | | | | | | | | 1【4.0g】 | 1【4.4g】 | |
| 15 | 01 | | | | | | | | | | 1【2.3g】 | |
| 15 | 04 | | | | | | | | | | 1【17.6g】 | 砥石 2 |
| 15 | 07 | | | | | | | | | | 2【56.0g】 | |
| 15 | 12 | | | | | | | | | 4【40.7g】 | | |
| 15 | 15 | | | | 2【8.7g】 | | | | | | | |
| 15 | 16 | ○ | | 1【8.9g】 | 23【139.5g】 | | | | | | | 剥片 2・打欠石錘 1 |
| 15 | 17 | | | | 2【8.2g】 | | | | | | | 礫器 1 |
| 15 | 21 | | | | | | | | | | 1【27.9g】 | |
| 15 | 22 | | | | | | | | | | 1【31.2g】 | |
| 15 | 25 | | | | 1【8.7g】 | | | | | | 7【40.8g】 | |
| 15 | 26 | | | | | | | | | | 3【15.4g】 | |
| 15 | 27 | | | | 2【8.1g】 | | | | | | 10【122.6g】 | |
| 16 | 01 | | | | | | | | | | 1【4.5g】 | |
| 16 | 12 | | 1【150.0g】 | | | | | | | | | 剥片 1 |
| 16 | 17 | | | | 2【11.9g】 | | | | | | | |
| 16 | 20 | | | 2【21.7g】 | 2【13.6g】 | | 3【15.7g】 | | | | | 磨石敲石類 1 |
| 16 | 23 | | | | 1【5.8g】 | | | | | | | 剥片 1 |
| 16 | 25 | ○ | | | 118【943.3g】 | | | 1【12.7g】 | | | | 剥片 1・磨石敲石類 1 |
| 16 | 30 | | | | | | | | | | 2【85.6g】 | |
| 16 | 32 | | | | | | | | | | 1【8.8g】 | |
| 16 | 33 | | | | | | | | | | 4【10.1g】 | |
| 16 | 34 | | | | | | | | | | 1【6.0g】 | |
| 16 | 35 | | | | | | | | 1【3.1g】 | | | |
| 16 | 36 | | | | | | | | | | 3【83.2g】 | |
| 16 | 39 | | | | | | | | | | 1【1.2g】 | |
| 16 | 40 | | | | | | | | | | 1【17.1g】 | |
| 16 | 50 | | | | | | | | | | 1【2.5g】 | |
| 16 | 60 | | | | | | | | | | 1【3.6g】 | |
| 16 | 68 | | | | | | | | | | 1【3.3g】 | |
| 16 | 70 | | | | | | | | | | 2【4.3g】 | |

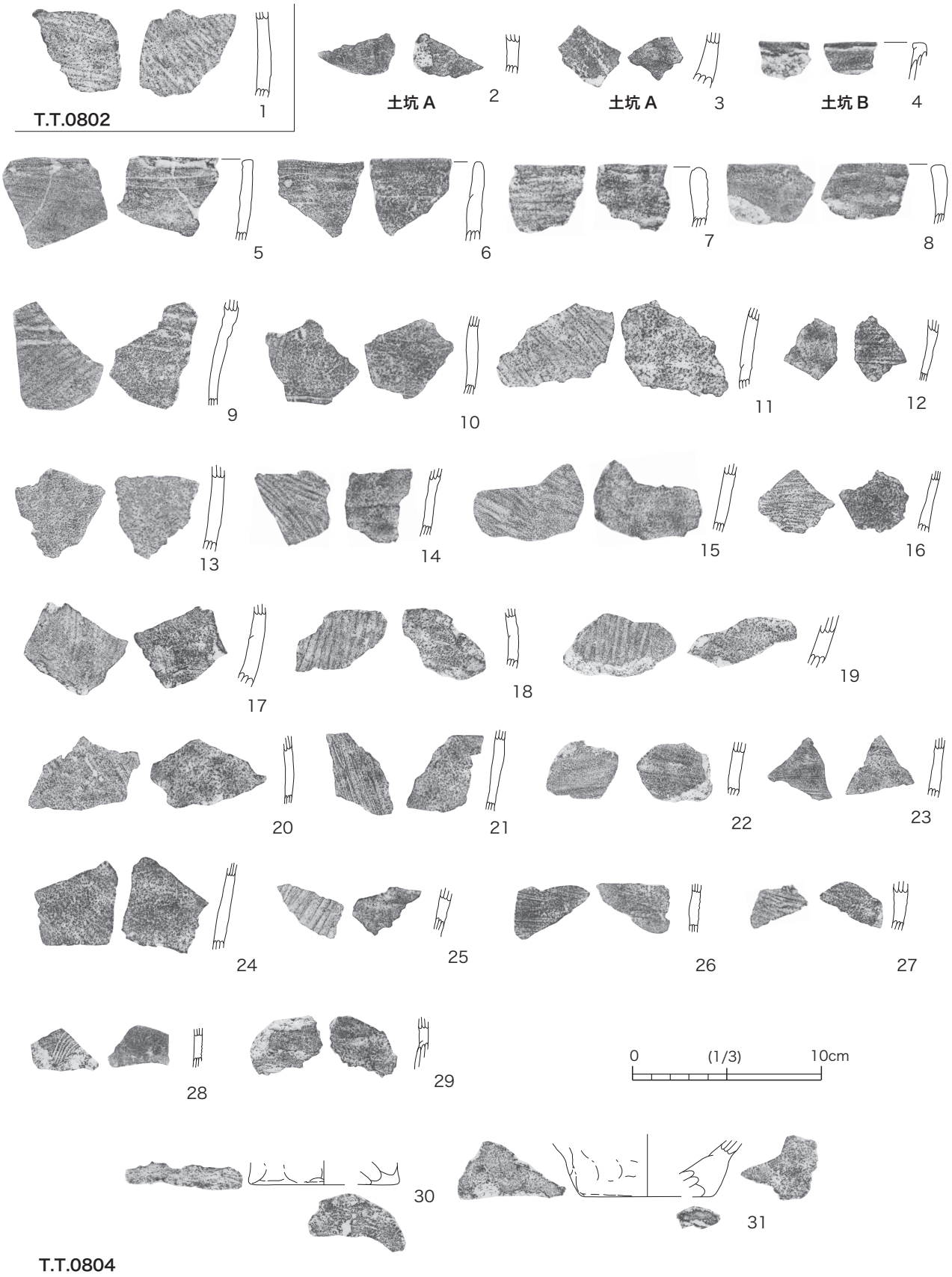


図 7　大名倉遺跡出土縄文土器 1

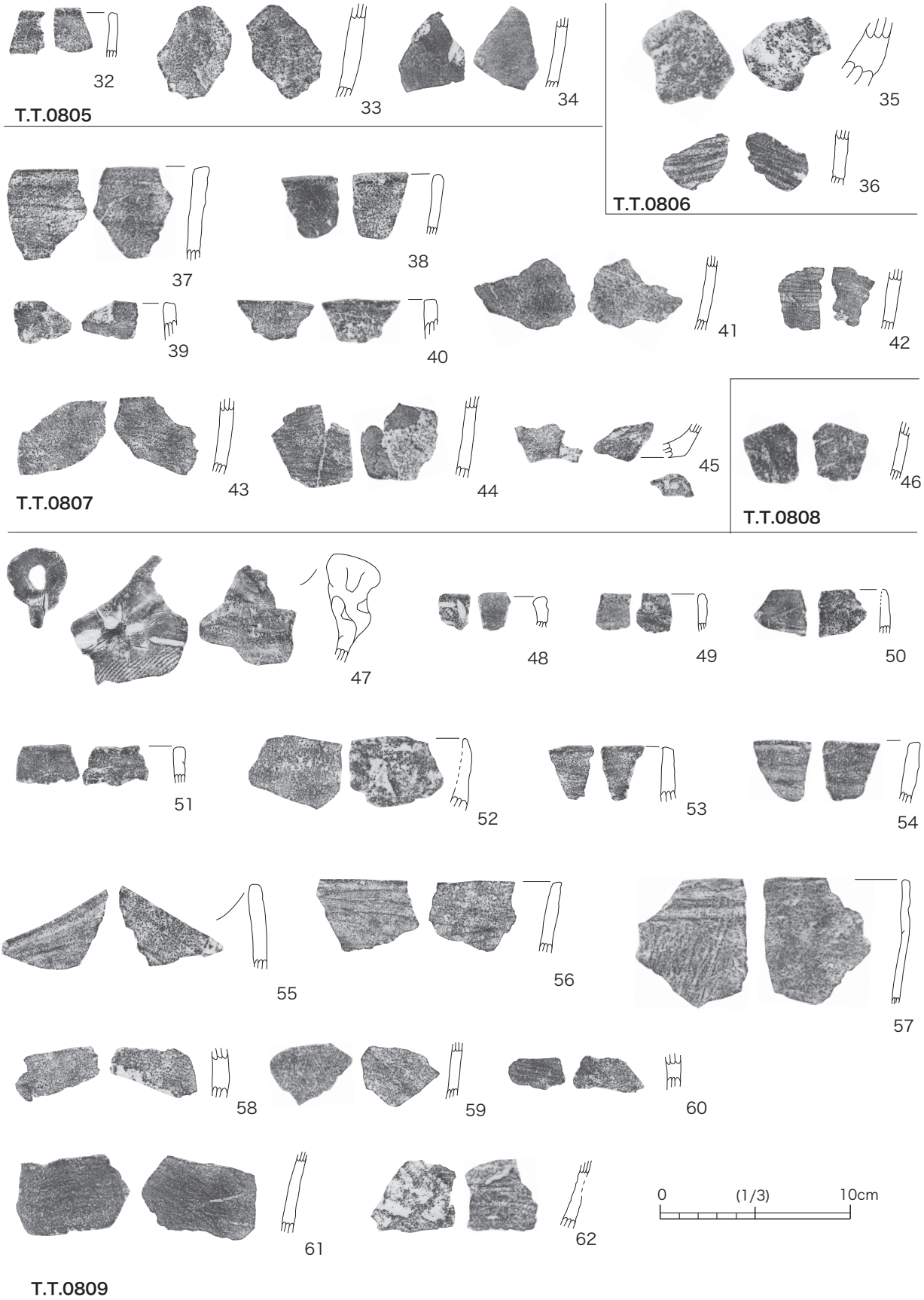


図８　大名倉遺跡出土縄文土器２

測されるが、37 は後期中葉などより古相のものかもしれない。

**T.T.0808 出土資料（図 8　46）**

深鉢胴部片で、器壁は 6mm 程度であるが、表裏ともに保存状態が良くない。胎土には繊維を含む土器であり、縄文時代早期に属するものと考えられる。

**T.T.0809 出土資料（図 8・8　47 ～ 72）**

47 は深鉢口縁部片で、環状の突起が斜め方向に貼り付けられたものである。突起は二重の輪が重なったように付けられたものであり、根元部分にはボタン状の貼り付けも認められる。沈線による区画のなかに、縄文 LR が施されている。縄文時代後期中葉の八王子式に伴う精製深鉢と考えられる。48 も深鉢口縁部片である。器壁厚は 8 ～ 10mm、端部上面には面取りがなされている。表には横方向の沈線区画内に縄文 RL が施されているが、横沈線の切れ目に、斜め方向に短い沈線がみとめられる。これは逆ハの字に展開するものであれば、47 同様に八王子式の精製深鉢であると考えられる。49 ～ 52 は深鉢口縁部片である。器面表裏にはナデ・ミガキ調整が施されているもので、後期中葉頃のものと推定される。

53 ～ 66 は器面表裏に巻貝条痕が施されているものである。器壁厚は 8 ～ 10mm 程度のものが多いなか、57 のみ 7mm 程度と薄手である。また、調整方向も横方向が多いなか、57 のみ表は縦あるいは斜方向である。57 には内側に工具痕を残した状態の巻貝凹線がある。これらは、後期後葉に属するものであるが、57 は神谷沢 I 式に当たるものと考えられる。

67 ～ 71 は深鉢胴部片で、器壁厚は 69 が 7mm 程度、その他が 10mm 程度である。器面表裏にはナデやケズリ痕があり、縄文時代後期～晩期に属するものと考えられる。

72 は壺あるいは注口土器の胴部片である。器面表面はナデ・ミガキが施され、内面はナデ・オサエなどの痕跡が確認できる。この範囲確認調査出土資料では、この器種は唯一の資料である。田口中学校生徒による表面採集資料および早稲田大学調査資料でも、注口部をはじめとして注口土器が一定量含まれている（写真 1）。

写真 1　大名倉遺跡出土の注口土器
（設楽町奥三河郷土館所蔵、上：伊藤正松氏採集資料、
下：早稲田大学発掘調査資料）

**T.T.0819 出土資料（図 9　73）**

73 は鉢胴部で、器壁厚は 8mm 程度、胎土は緻密である。器面表には細い棒状工具による細かい連続刺突のある沈線と縄文 LR が施されている。裏はナデ・ミガキ痕が認められる。縄文時代後期中葉以降の精製鉢と考えられる。

**T.T.0829 出土資料（図 9　74・75）**

74 は深鉢口縁部で、端部が外反気味に尖る形状を呈し、器壁厚は最大 12mm 程度となる。器面表の調整は不明瞭ではあるが、裏には横方向にナデあるいは条痕が認められる。縄文時代後期～晩期のなかでも、晩期前半に属する可能性があるか。75 は深鉢胴部片である。器面表は縦方向にナデ・ミガキ、裏には横方向にナデやケズリの痕跡が痕察される。縄文時代後期～晩期のものと考えられる。

**平成 20 年度表面採集資料（図 9　76 ～ 82）**

76 は深鉢胴部片で、器壁厚は 7mm 程度と薄手で、胎土が緻密なものである。器面はミガ

キ調整を主体として、表には沈線区画に縄文LRが施されている。後期中葉八王子式以前のものと推定される。77は深鉢胴部破片で、胴部中央部付近に当たるか。屈曲上には横方向に太沈線が、さらに沈線間には縄文LRが施されている。後期中葉の八王子式から西北出式・蜆塚KII式（蜆塚III式）までに相当するものと考えられる。78は深鉢口縁部片で、器面表裏には巻貝条痕調整が施されており、表には横方向に浅い凹線が施されている。凹線は浅いものの、中にはナデ調整が施されてはいない。79・80は深鉢口縁部片である。器面両面には横方向にナデ・ミガキ調整が施されている。縄文時代後期前葉以降のものと考えられるが、一方、81・82には器面表裏には巻貝条痕調整が施されている。縄文時代後期後葉～末に属するもの

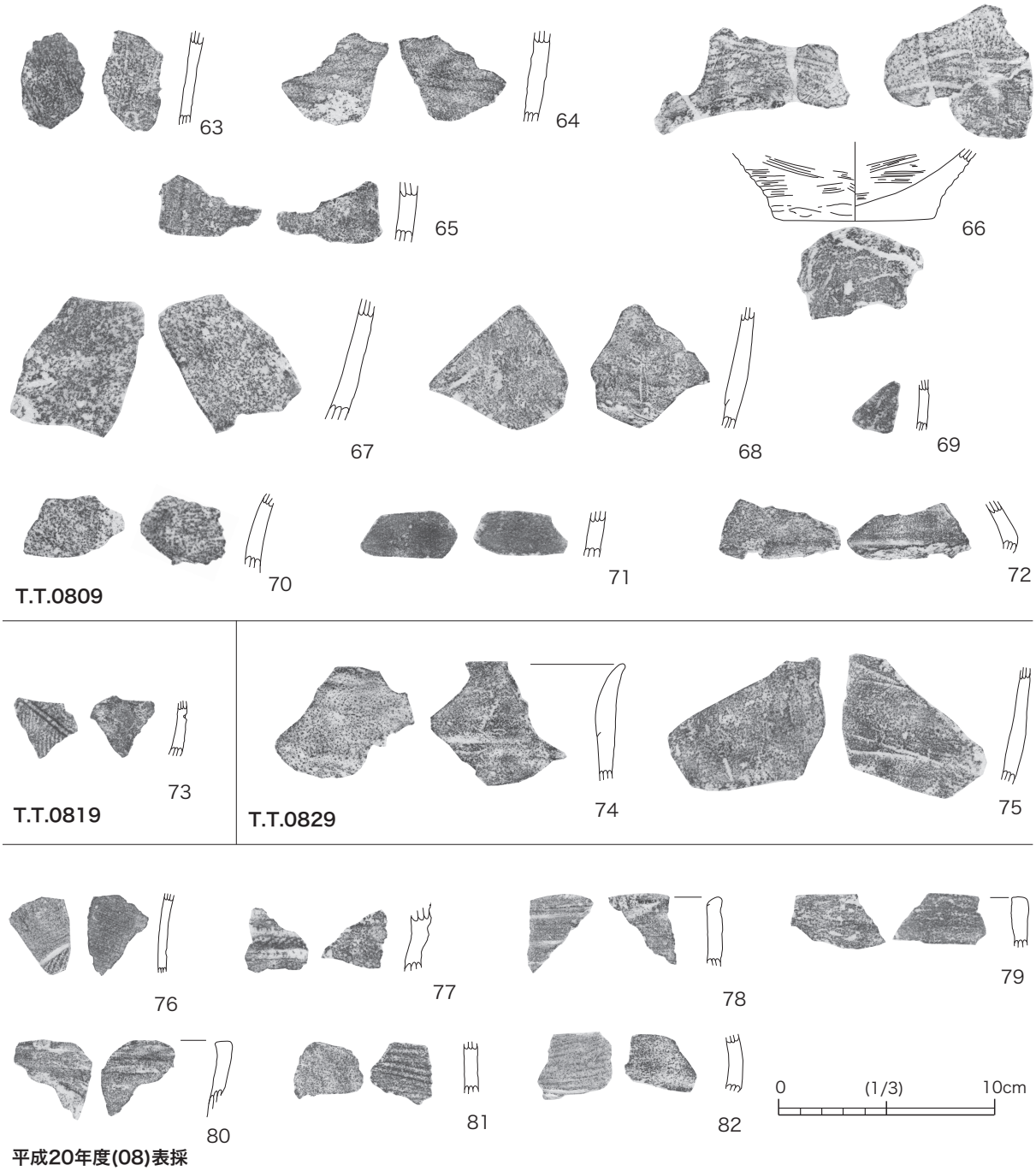


図9　大名倉遺跡出土縄文土器3

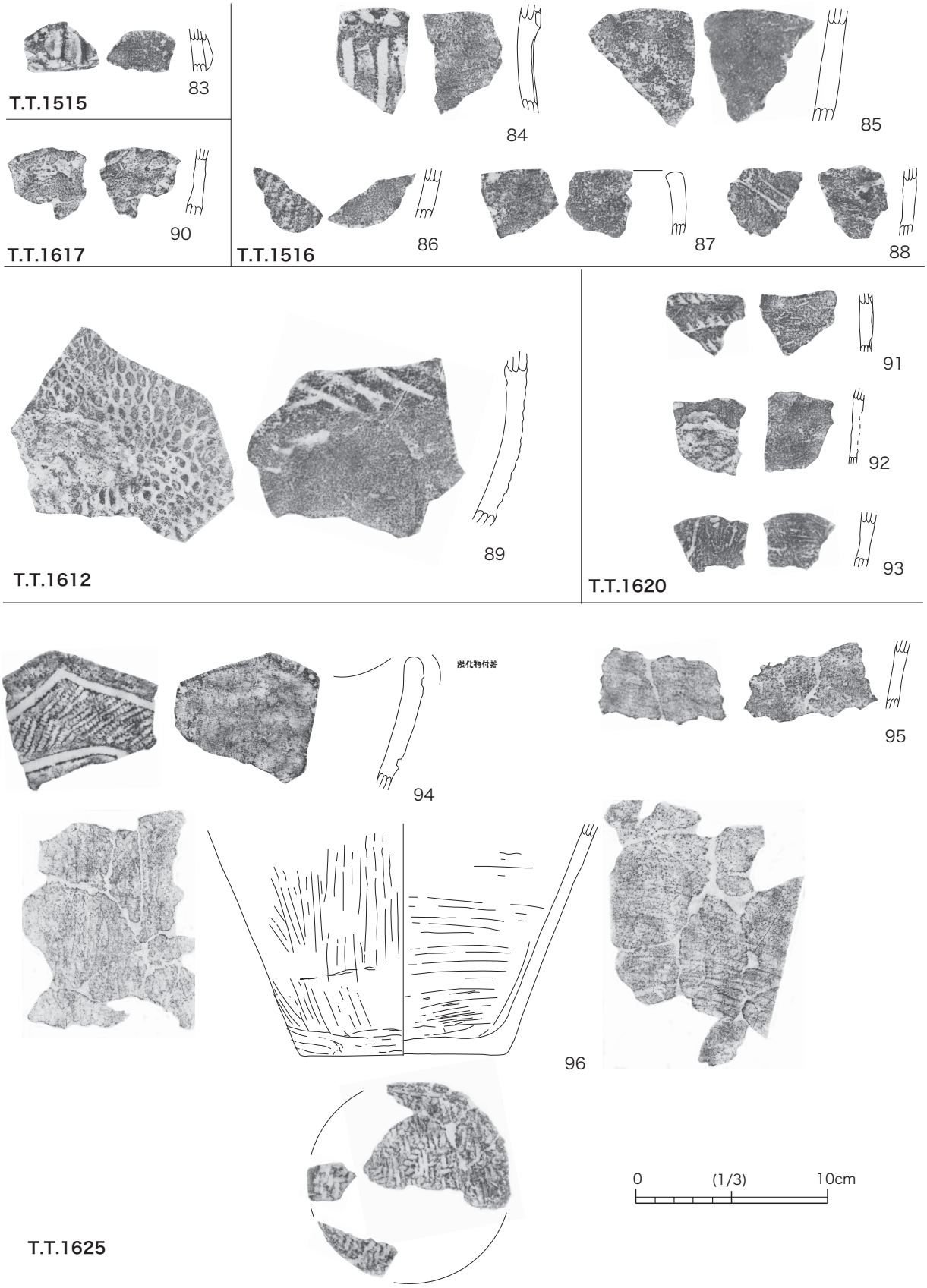


図 10　大名倉遺跡出土縄文土器 4

と考えられる。

**T.T.1515 出土資料（図 10　83）**

深鉢胴部片で、小さい破片と保存状況は良好ではない。器面表には縦方向に短い貼付隆帯が連続して確認できる。北屋敷式など、縄文時代中期中葉に属するものと考えられる。

**T.T.1516 出土資料（図 10　84 ～ 88）**

84 ～ 86・88 は深鉢胴部片、87 は深鉢口縁部片である。いずれも器壁厚さが 10mm を超えるものである。84 は胴部上半で、横方向に連続刺突の施された貼付隆帯があり、その直下から太沈線が垂下する。この土器の類例は、岡崎市車塚遺跡 09 区 1739SP 出土資料にあり【池本編 2015】、縄文時代中期後葉の島崎 III 式～山の神 I 式に属するものと考えられる。85 は器面には表裏ともにナデ調整が残されているものである。86 は器面表に縄文 LR が施されているものである。87・88 はこのトレンチ掘削の最下層から出土した資料である。87 は表裏ナデ調整で、縄文時代中期後半の深鉢片か。88 は器面表裏には二枚貝と思われる条痕調整があり、表にはあたりの浅い平行沈線が認められる。胎土には繊維が含まれており、縄文時代早期後半に属するものと考えられる。

**T.T.1612 出土資料（図 10　89）**

土器の出土は、このトレンチ調査で 4 層とされた、89 の 1 点のみであるが、大型破片であり、状態は良好である。深鉢胴部中央部付近で、器壁厚は 15mm ほどあり、胎土には繊維を含む。器面表にはポジティブな楕円押型文が認められるもので、裏面には斜行する平行沈線がある。縄文時代早期前半の高山寺式の古相にあたるものと考えられる。

**T.T.1617 出土資料（図 10　90）**

胴部片でした下半部の資料であろうか。器面表裏にはナデやオサエなどの痕跡が認められる。縄文時代中期頃のものとも思われるが、詳細な時期は特定し得ない。

**T.T.1620 出土資料（図 10　91 ～ 93）**

いずれも深鉢胴部片であり、91・93 は器壁厚は 10mm 程度で胎土に繊維を含む。92 は器壁厚 8mm ほどである。91 には器面表裏には条痕調整があり、表面には爪形をした連続刺突列が少なくとも 3 条認められる。92 も器面表裏には条痕調整があり、表面には浅い波状の沈線が施されてる。いずれも縄文時代早期後半に属するものであり、91 は石山式に比定されると考えられる。

**T.T.1625 出土資料（図 10・11　94 ～ 100）**

94 ～ 96 は埋甕の可能性のある土器埋設遺構使用土器である。すべて同一個体由来のもので、94 は口縁部、95 は胴部上半、96 は胴部下半から底部に当たる。器壁厚は 10mm 前後であり、口縁部はやや肥厚気味である。器面調整はナデ・ミガキが施されており、口縁部から胴部上半はヨコ方向に、胴部下半は外面のみ縦方向を主体とする。94 には、外面に太沈線区画内に縄文 LR の充填が認められる。底面には編組製品圧痕があり、木目ゴザ目組みの可能性がある。時期は、縄文時代後期初頭の中津・称名寺式のものと考えられる。97・98 は深鉢胴部片で、器壁厚は 8mm 程度である。器面表裏にはナデ調整が認められる。97 の外面には 2 条沈線による細長い区画が斜方向でつながりながら横方向に展開するようにも見える。これも縄文時代後期初頭の中津・称名寺式のものと考えられる。99 は深鉢口縁部片で、器面表裏には巻貝条痕調整があり、端部上面には細い工具（これも巻貝工具の可能性がある）による連続刺突列が施されている。器面表裏にはいわゆる半截竹管工具（これも巻貝工具）による弧状沈線と刺突列がある。縄文時代晩期前半に属する可能性がある。100 は深鉢底部である。底部に編組製品圧痕があり、1 本越え・1 本潜り・1 本送りの網代組みである。

**(B) 石器（縄文時代）**

縄文時代の石器では、スクレイパー・剥片・礫器もしくは大型剥片石核・大型剥片・打欠石錘・磨石敲石類の出土をみた（図 12）。

102・103 はスクレイパーである。102 は横長に作出された剥片で、端部の表面に連続した二次加工が施されたものである。103 も横方向に剥片を剥がしとられて残った方を使用しており、石核石器状の様相を呈する。端部に二次加工により連続した剥離が施されている。102・103 とも石材は安山岩で、T.T.0809 出土である。

104 は黒曜石の剥片である。今回の範囲確認

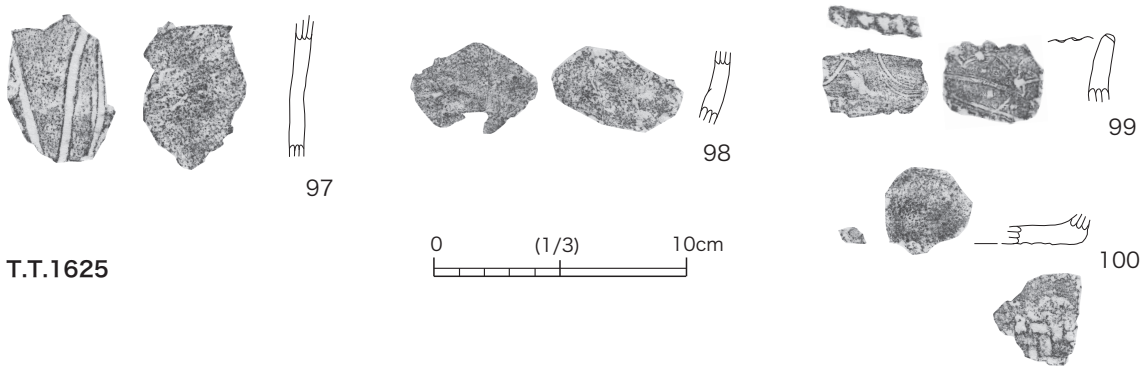


図 11　大名倉遺跡出土縄文土器 5

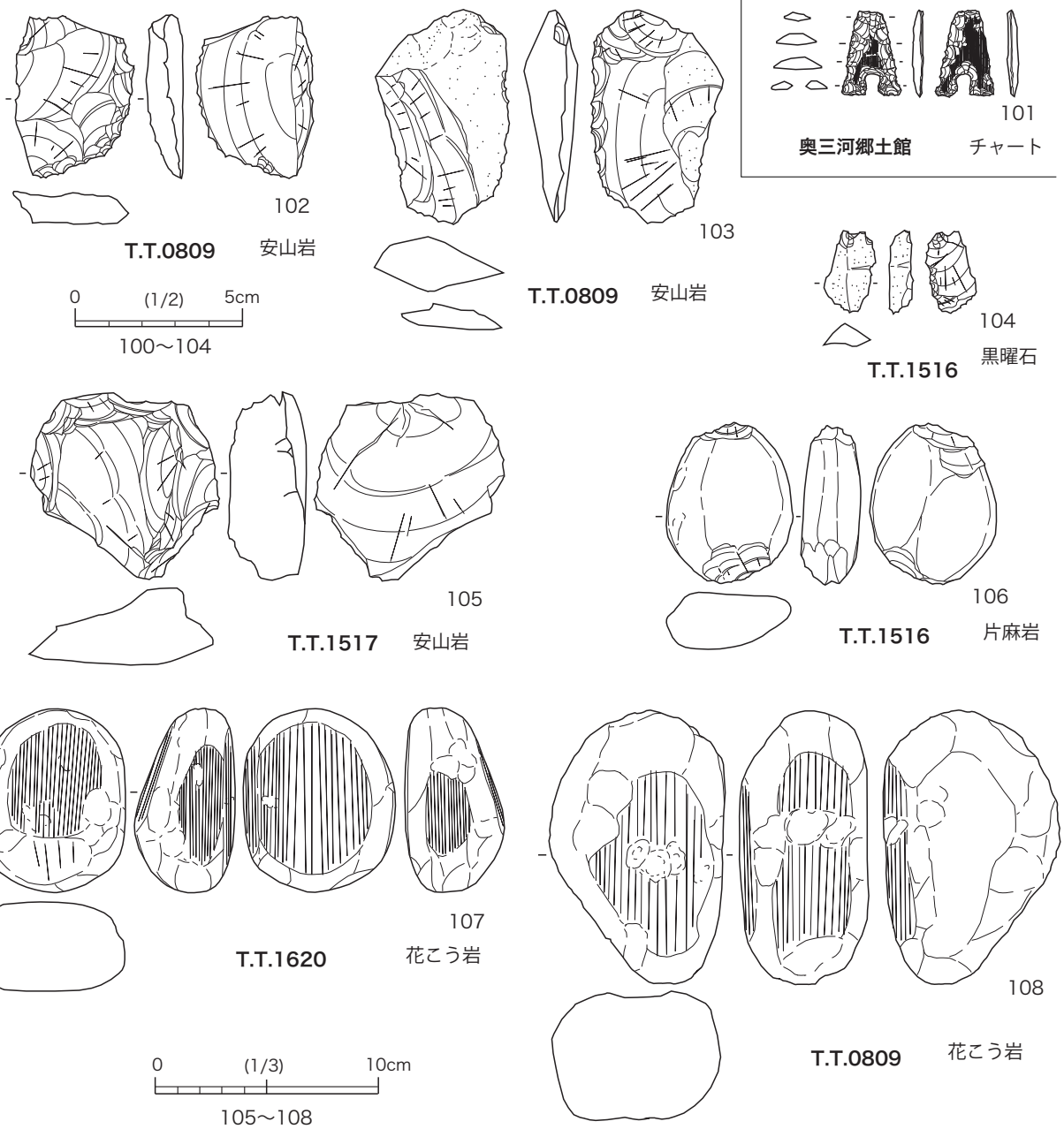


図 12　大名倉遺跡出土石器

調査において黒曜石の出土は、この1点のみである。T.T.1516出土で、ここでは竪穴建物跡の可能性のある遺構が見つかっている。

105は礫器あるいは大型剥片石核と考えられる。断面形は台形を呈するもので厚手である。石材は安山岩で、T.T.1517出土ある。

106は打欠石錘と考えられる。対向する両端に剥離が認められるものであるが、厚みのある円礫であるためか剥離部分の中央は潰れた状態となっている。剥離は両極打撃によるものか。石材は片麻岩で、T.T.1516出土である。

107・108は磨石敲石類である。107は両平面に著しい磨滅痕が残されているもので、面の形成をみる。108は平面・側面に著しい磨滅痕が残されているもので、かつ同一面上に連続した凹みが認められる。凹みは浅く、敲打によって形成されたものと考えられる。107はT.T.1620出土、108はT.T.0809出土で、石材は花こう岩である。

101はトロトロ石器である。この資料は、範囲確認調査ではなく、奥三河郷土館の所蔵資料である。図上面側には垂直方向に連続した細かい剥離調整があり、尖る形状には決してなっていない。図面下側の二又部は独特なクビレ形状を呈している。両平面ともに中央部を中心として研磨あるいは磨滅の痕跡がよく残されている。また両側面にも研磨あるいは磨滅の痕跡があり、細長い面が形成されていることが注目される。トロトロ石器は、縄文時代早期前半の黄島式や高山寺式の頃に伴うことが知られている。先に報告した89の参考資料として掲載するものである。

**(C) 中世陶器**

中世から戦国期、さらには近世前半の資料も散発的に出土している（図13）。109は瀬戸・美濃窯産陶器筒形香炉の口縁部片と考えられる。110は古瀬戸後期様式の四耳壺底部である。111は瀬戸・美濃窯産陶器の端反皿口縁部、112は瀬戸・美濃窯産陶器、天目茶碗の口縁部である。

なお、近世以降に属する石器として、 砥石も3点出土している。いずれも置き砥石で、石材は凝灰岩である。最も大きいものは、長さ21.4cm・重さ1703gをはかるものである（写真2）。

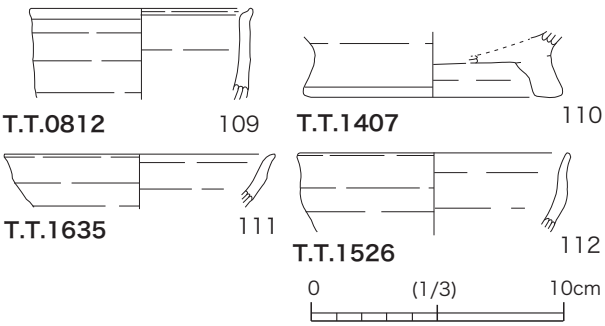


図13　大名倉遺跡出土中世陶器

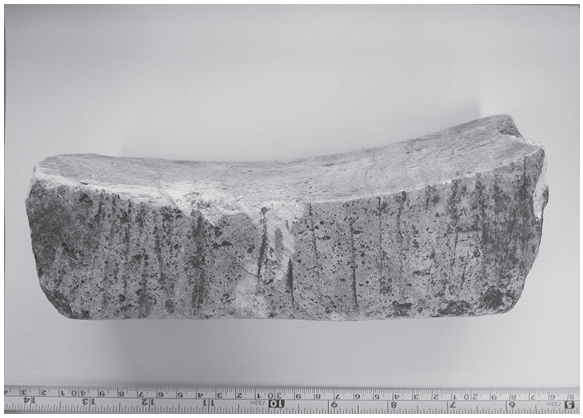

写真2　T.T.1308出土砥石

以上、近年の範囲確認調査で出土した資料について、概要を報告した。大名倉遺跡出土遺物については、当地に住まわれていた伊藤正松氏の採集資料が古くから知られており、『三州名倉』にはその一部が掲載資料が掲載されている【沢田ほか1951】。本誌では、遺物の出土状況の写真も掲載されており、大変興味深い（同19頁）。伊藤氏は、その後これらの資料を設楽町に寄贈することになるが、それが町立の郷土博物館の設立の発端となったという【岡田ほか1968】。伊藤氏らの調査区域についてより詳細な成果として早稲田大学調査資料がある【平野2005】。ここで報告した範囲確認調査資料の成果は、大名倉遺跡をより広域的に俯瞰するものであり、今後の遺跡研究への情報提供となれば、幸いである。　（川添和暁）

## 6．遺物出土地点と地形の関係

先述のように範囲確認調査における重点の(2)として原地形の復元が挙げられる。ここではまず、トレンチ別の遺物出土状況（表3）を踏まえて、遺跡の枢要部にしぼって検討する。

全時代を通じて土器・陶器・石器が出土しているのは遺跡西部から北部であり、平成19・28年度に対象とした遺跡南部ではほぼない状況である。とりわけ多量の縄文土器が出土して注目されるのは、T.T.0802～0809、T.T.1516、T.T.1612などで、早稲田大学が調査した「下谷遺跡」の地区の周辺に限られる。

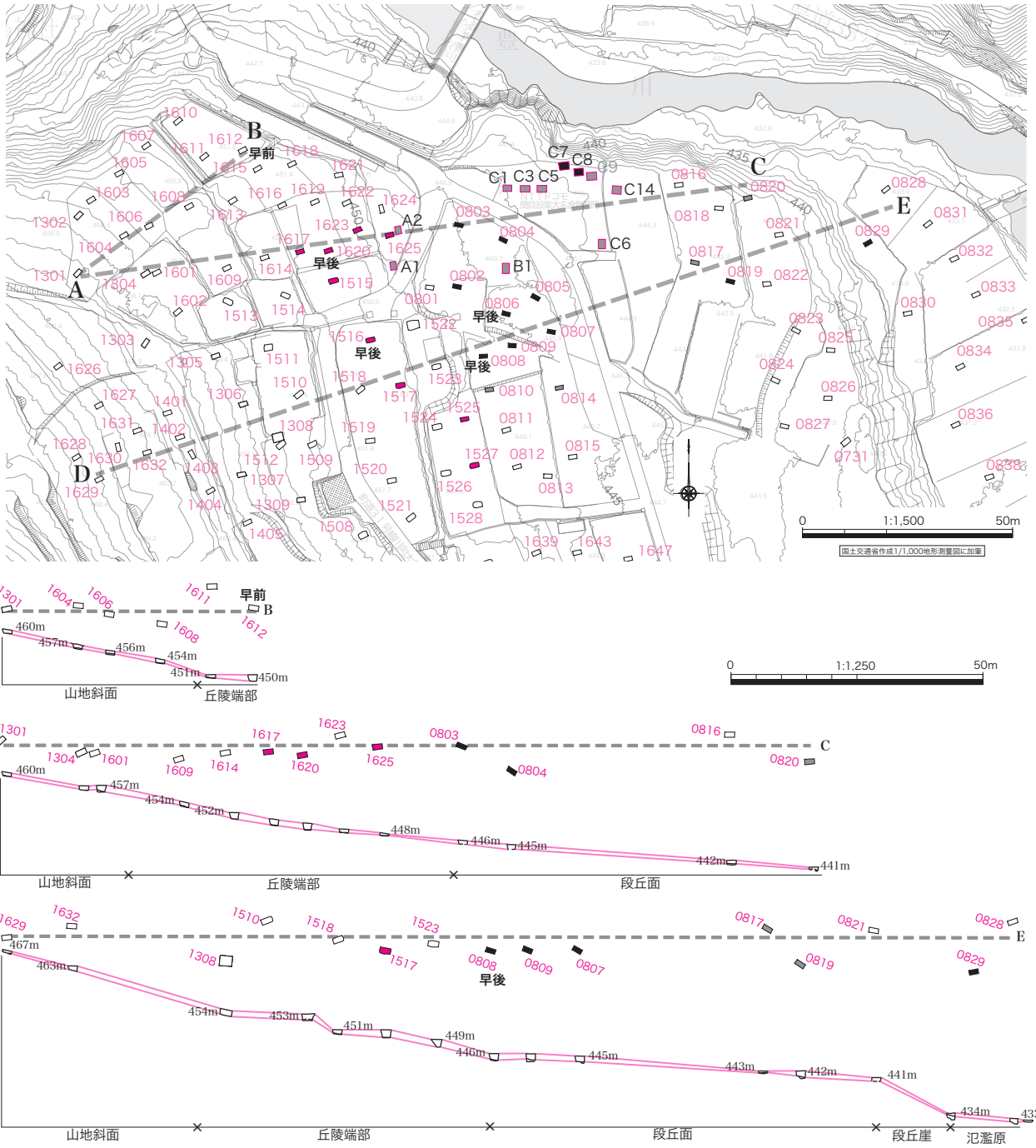


図14　大名倉遺跡枢要部における遺物の出土状況と地形断面

さらに時期別にみると、縄文時代中期後葉〜後期初頭の一群と、縄文時代後期中〜後葉の一群が平面的に分かれる（図 14 上）。

そこでそれらトレンチにかかるように直線を設定して地形の断面を作成し、遺物の出土状況との対応関係をみる（図 14 下）。これは各トレンチの地表面と基盤層面をそれぞれ延長させたものであるが、以下の通り留意点は２つある。

１点目は基盤層が傾斜する丘陵端部で中期後葉〜後期初頭の土器が出土するのに対し、それに比べて緩傾斜の段丘面で後期中〜後葉の土器が出土する点である。特に A-C ラインでは、T.T.0804 〜 0816 で早稲田大学調査の C 地点も経由することから後期の土器集中域となっている。このことから平面的にも分布が重ならない両者が地形的にも明瞭に区分されるかたちとなった。

２点目は、地表面と基盤層の間の層厚が地形に対応して異なる点である。段丘面では比較的それが薄く、傾斜面で厚くなる傾向がみられる。これは例えば T.T.1515 のように近世以降の造成によって上部が撹乱されている例（図 6）もあるが、同トレンチでは造成層の下位で縄文土器の包含層（第３層）と遺構（第４層）が検出されていることから、元から表層土が厚いために削平されずに残存しているものと考えられる。さらにその遺構は礫混じりの黒色土（第 5・6 層）に対して掘り込まれており、礫のない包含層との対比が興味深い。それは現在も耕作地である T.T.1620（図 6）を参照しても明らかで、耕作土直下の表層土の大半が礫の少ない黒色土・黒褐色土で占められている。同トレンチでは上部の第２層は旧耕作土とみられるが、第３層からは早期後半および中期後葉〜後期初頭の土器と磨石敲石類が出土している。同層下位の第４〜５層では出土遺物はないが、基盤層に掘り込まれる土坑があるので、同様に包含層である可能性が考えられる。つまり、傾斜面となる丘陵端部では、縄文時代中期後葉以降からほぼ現代に至るまで礫の少ない黒色土の生成が継続され、その中に縄文時代早期および中期の遺物が包含されている状況がうかがえるのである。このことは焼畑などの斜面地利用の歴史にも関わるので、周辺地域も含めてあらためて検討したい。

また、以上の土器出土集中域に縄文時代早期の土器の分布域が重なる点も注意しておく必要がある。これらは数点ずつの出土でしかないので散漫な印象を受けるが、特徴的な微地形に関わっている可能性がある。早期前半の土器が出土した T.T.1612 は岬状に突出した丘陵端部とみられる。逆に早期後半の土器がある T.T.1620 は基盤層が周囲のトレンチよりも砂質が強く、先述のように黒色土の堆積も際立っていることから、小くぼ地の縁辺に相当するとみられる。また T.T.0806・0808 は丘陵端部から段丘面への傾斜変換点に位置している。早期後半の土器は T.T.1516 でも出土しているので、これらはより高位に存在した遺物が後の改変によって移動した可能性も考えられるが、だとしても丘陵端部の限られた地点にその原位置を求められるのではないだろうか。

## 7．大名倉遺跡における活動域の変遷

以上のように、遺物分布と地形の関係をみてきた。もとよりトレンチ調査では性格の特定できる遺構の検出は難しい。しかしトレンチ調査で出土した石器は、磨石敲石類、石皿台石類、打欠石錘など、縄文時代の集落で一般的な器種があることから、大名倉遺跡も集落遺跡として捉える。ここでは大名倉遺跡における集落としての土地利用がどのように変遷してきたのかを考える。

縄文土器の出土分布域からそれぞれ中期後葉〜後期初頭と後期中葉〜後葉における活動範囲を描いてみる。先述のように両者はあまり重複することがなく、高低差でも分かれている。前者が幅約 16m× 長さ 72m の細長い区域に対して後者は長径 80m× 短径 50m の不整な楕円形の区域が想定される。おそらくこれらが集落域の主体になるであろう。

縄文時代中期後葉〜後期初頭の集落域は斜面地を志向する立地となっているが、概ね標高 450m が上限となっている。標高 450m から上位では傾斜が増すことから、このような急傾斜は土地利用を避けていたと考えられる。現況では T.T.1515 と T.T.1516 の間に山地（字滝ノ下）

から用水路が引かれている。これがそのまま当時の川であったとは考えにくいが、T.T.1303付近は湧水で湿地状を呈しており、背後に湧水点が集落の維持装置になっていたと推測されよう。

縄文時代後期中葉〜後葉の集落域は、中期のそれを全く踏襲していない。ただし先述のように、黒色土の厚い堆積は主に中期の集落廃絶後に進んだとみられ、当該期に黒色土の生成につながるような利用が斜面地でなされていた可能性もあろう。一方、段丘面での遺物分布状況は一様ではなく、T.T.0804・0809や早稲田大学C7などいくつかの集中地点がみられる。また東方の段丘崖付近は希薄である。問題は南側への広がりであるが、早稲田大学調査地点から東海自然歩道に沿った東側は現在ビオトープとして保全されているためトレンチ調査がなされていない区域がある。そのさらに南側は、T.T.0824・0826・0827では基盤層付近で湧水があるのでここは谷地形に相当するとみられる。そこから谷が段丘を抉りこんでいるとすれば、T.T.0815の基盤層標高が約444.25m、T.T.1644で 約444.0m、T.T.0813で約444.8m、T.T.1639で約446.0mとなるこ

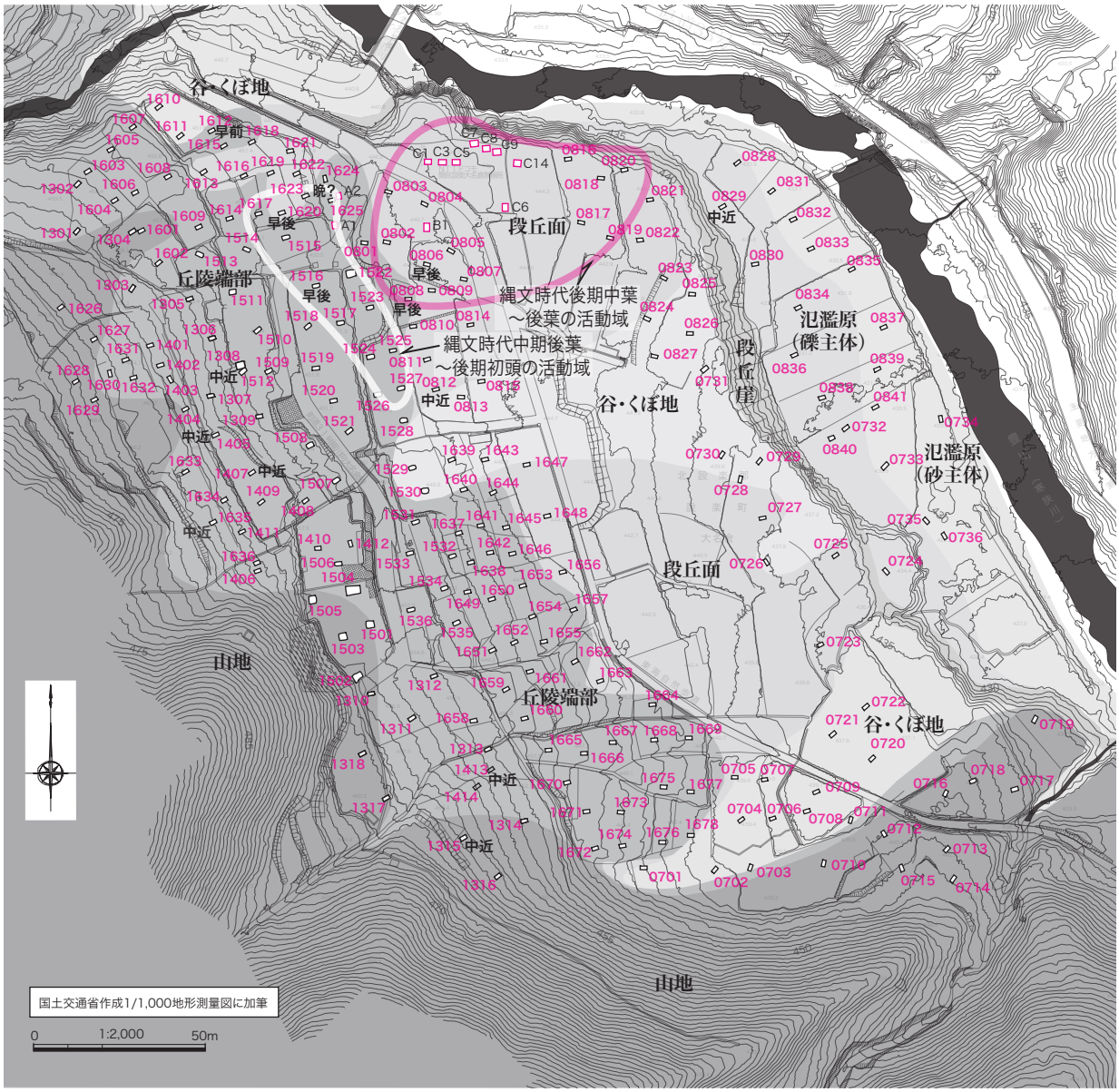


図15　大名倉遺跡における縄文時代遺跡の展開（1:2,000）

とから当該地点が谷奥になるとみられる。したがってここから北側の T.T.0812 付近が段丘縁になるのであるが、T.T.0810 ～ 0812 では出土遺物がない。よっておそらく T.T.0814 付近が集落域南限になると推測される。しかし後期の集落からすればこの谷地形が最も近い水源地であり、水場の周辺で食糧の加工などの作業を行っていた可能性がある。

以上のような、縄文時代中期と後期の活動域の変遷は、豊川の対岸に立地する西地・東地遺跡にもみることができる。当該遺跡では調査区のほぼ全域で中期末～後期初頭の土器の出土分布がみられるのに対し、後期後葉～晩期の土器は調査区南西隅の比較的低位に集中する【川添 2018】。ここでは分布域は重複するものの、その中心が高位から低位へと移動する点は同様である。

ところで、先述のように大名倉遺跡では縄文時代晩期の土器も出土しており、これまでにも研究者に注目されてきた経緯がある。しかしながら範囲確認調査では晩期と特定できる土器はなく、その分布も明らかではない。より限られた出土傾向となるのであれば興味深い。

## 8．むすびにかえて

大名倉遺跡では、弥生時代以降の土地利用は低調で、西地・東地遺跡とともに平安時代の灰釉陶器が若干出土する。その後本格的に集落域となるのは中世後半以降であり、範囲確認調査では標高 450m 付近で古瀬戸後期様式の四耳壺や戦国時代の土師器が出土しており、さらに上位の地点で近世陶磁器が出土している。おそらくこの段階の土地利用が現代まで踏襲されているものと考えられる。（永井邦仁）

謝辞：本稿を作成するにあたり以下の諸氏・機関にご教示とご協力をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称略）。

設楽町奥三河郷土館　石井峻人　鵜飼堅証　平野吾郎



**引用・参考文献**

愛知県教育委員会　2007『設楽ダム関連遺跡総合事前調査　詳細遺跡分布調査報告書』
岩野見司　2002「大名倉遺跡」『愛知県史　資料編 1 考古 1　旧石器・縄文』 愛知県
大橋　勤　2005 『愛知県における考古学の発達』
岡田松三郎・沢田久夫・鈴木冨美夫・夏目一平・村松信三郎ほか　1968 『北設楽郡史　原始～中世』 北設楽郡史編纂委員会
岡久雅浩　2009 「笹平遺跡・万瀬遺跡・大名倉遺跡」『年報』平成 20 年度　愛知県埋蔵文化財センター
小栗鉄次郎　1932 「北設楽郡に於ける先史時代及び原史時代の遺蹟」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十　愛知県
川添和暁　2016 「大名倉遺跡ほか 14 遺跡（範囲確認）」『年報』平成 27 年度　愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁　2018 「西地・東地遺跡の整理作業」『新設楽発見伝 4　配布資料　愛知県埋蔵文化財センター
紅村　弘　1963 『東海の先史遺跡　総括編』東海叢書第十三巻　名古屋鉄道
桜井清彦・平野吾郎　1966 「愛知県北設楽町神田中向遺跡の調査」『古代』47 号　早稲田大学考古学会
桜井清彦・平野吾郎　1968 「愛知県北設楽町神谷沢遺跡の調査」『史観』77 冊　早稲田大学史学会
桜井清彦・平野吾郎　1971 「愛知県北設楽町納庫麦田遺跡の調査」『古代』54 号　早稲田大学考古学会
沢田久夫ほか　1951 『三州名倉』 名倉村
鈴木冨美夫　1997 「北設楽郡と考古学の関りについて」『文化財専門委員活動報告』7　設楽町教育委員会
鈴木正貴　2015 「設楽ダム工事関連遺跡範囲確認調査 大名倉遺跡 上戸神遺跡 川向萩ノ平沢遺跡 大栗遺跡 永江沢遺跡」『年報』平成 26 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2014 「滝瀬遺跡始め 4 遺跡（範囲確認調査）大名倉遺跡 / 西地・東地遺跡 / 万瀬遺跡 / 滝瀬遺跡」『年報』平成 25 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2017 「大名倉遺跡（範囲確認調査）」『年報』平成 28 年度　愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁　2018 「大名倉遺跡」『新設楽発見伝 4　配布資料』 愛知県埋蔵文化財センター
平野吾郎　2005 『下谷遺跡（愛知県北設楽における縄文時代遺跡の調査）』北設楽縄文文化研究会
松田　訓　2008 「大名倉遺跡・大崎遺蹟」『年報』平成 19 年度　愛知県埋蔵文化財センター
森田勝三　2013 『久永春男遺跡調査日誌』野帳の会